

松原市文化財報告 第15冊

新堂遺跡 3

松原市新堂4丁目地内における店舗建設工事に伴う新堂遺跡E7-1-69発掘調査報告書

令和5年(2023)6月

松原市教育委員会

松原市文化財報告 第15冊

新堂遺跡 3

松原市新における店舗建設工事に伴う新堂遺跡E7-1-69発掘調査報告書

令和5年（2023）6月

松原市教育委員会

例言

1. 本書は、松原市教育委員会が事業者であるイオンタウン株式会社から依頼を受け、令和4年度に実施した周知の埋蔵文化財包蔵地「新堂遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査にかかる費用は、調査依頼者のイオンタウン株式会社が負担した。
3. 現地調査・整理作業は大矢祐司（松原市教育委員会）が担当し、現地調査を古川登・西尾唯史（(株)島田組）、整理作業を古川登・西尾唯史・出口まゆみ・高見澤太基（(株)島田組）がそれぞれ補佐した。
4. 本書の作成は大矢が指揮し、編集も行った。執筆は、第1～2章・第3章第1節・第4章を大矢が、第3章第2節を高見澤、第3章第3節を高見澤・古川が、それぞれ担当した。
5. 本書で用いた座標値は、すべて世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第VI系の数値で、「m」単位で表記した。また、水準値は東京湾平均海面「T.P.」を基準とする海拔高で表した（例：H=23.0m）。
6. 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて目視により比定した。
7. 発掘した遺構は、検出順に3桁のアラビア数字で通し番号をつけ、その前に遺構記号の標示である「S」を付して遺構台帳を作成した（例：S001）。
8. 発掘調査にあたっては、調査依頼者であるイオンタウン株式会社をはじめ関係者の皆様にご協力を得るとともに、下記の方々にご指導・ご教示を賜った（順不同・敬称略）。
井上智博・市村慎太郎（(公財)大阪府文化財センター）、三好玄（大阪府立弥生文化博物館）、田中元浩（和歌山県立紀伊風土記の丘）、積山洋（(一財)大阪市文化財協会）
9. 発掘調査に伴う遺物および図面・写真などの記録類は、全て松原市教育委員会が保管している。
10. 本書の制作にあたり、下記の文献を参考にした。

足立俊彦・野藤和也 編 1988『松原市遺跡発掘調査概要 昭和62年度』,松原市教育委員会

足利健亮 1985「第2章 律令制下の丹比地方 3条里制」『松原市史』第1巻 本文編1,松原市役所

森岡秀人・西村 歩 編 2006『古式土師器の年代学』,財団法人大阪府文化財センター

井上智博 編 2017『瓜破北遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第238号,(公財)大阪府文化財センター

大矢祐司 編・丹生奏雪 2021『新堂遺跡2』松原市文化財報告第11冊,松原市教育委員会

大野 薫 編 1981『丹比柴籬宮跡発掘調査概要・I』,大阪府教育委員会

川瀬貴子 編・文化財調査コンサルタント株式会社 2020『新堂遺跡』松原市文化財報告第8冊・公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第303集,松原市教育委員会・(公財)大阪府文化財センター

地村邦夫・藤沢真依 編 2006『新堂遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2005-6,大阪府教育委員会

趙 哲済 2001「瓜破台地東北部の段丘について」『大阪市文化財協会 研究紀要』第4号

寺沢薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編I,木耳社

寺沢薫・森岡秀人 編 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編II,木耳社

原田昌則 2003「第5章 遺構・遺物の検討 第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告74

松田順一郎 編 1997『鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地震層序』,(財)東大阪市文化財協会

松田順一郎 1996「第V章 考察・分析 第3節 若江北遺跡第5次調査地でみられたさまざまな地震痕跡」『東大阪市所在巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書第5次』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第15集,(財)大阪府文化財センター

松原市新堂4丁目土地区画整理組合 2023『南部大阪都市計画事業松原市新堂4丁目土地区画整理事業事業誌』,松原市新堂4丁目土地区画整理組合

米田敏幸 1991「2土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器, 雄山閣

本文目次

例言	検出遺構	6
目次 (本文目次・図目次・表目次・図版目次)	出土遺物	19
1 調査に至る経緯と経過	4 総括	32
2 位置と環境	写真図版	
地理・歴史的環境	抄録	
周辺の発掘調査成果	奥付	
3 調査成果		
基本層序		

図目次

図1 新堂遺跡周辺埋蔵文化財包蔵地分布図 (1:25000)	図14 S005凹地上層遺物出土状況図 (1:40)	16
図2 調査地および周辺主要調査地位置図 (1:10000)	図15 S005凹地遺構図・下層遺物出土状況図 (1:40)	17
図3 発掘調査位置図 (1:2000)	図16 S005・S010凹地断面図 (1:40)	18
図4 第3層上面の地震動による変形構造	図17 S001落ち込み・S004溝・S006ため池出土土器 (1:4)	19
図5 調査区東壁断面図 (水平1:100・垂直1:40)	図18 土器の打割り穿孔状況 (左:掲載番号32、 右:掲載番号20 S005凹地 下層出土)	20
図6 全体遺構図 (1:200)	図19 S005凹地出土土器 (1) (1:4)	22
図7 S002～S004溝・S010凹地・S021～S023ピット断面図、 S020土坑遺構図・断面図 (1:40)	図20 S005凹地出土土器 (2) (1:4)	23
図8 S002～S004溝・S010凹地・ S021～S023ピット遺構図 (1:40)	図21 S005凹地出土土器 (3) (1:4)	24
図9 S007井戸・S008溝遺構図・断面図 (1:40)	図22 S005凹地出土土器 (4)・土製品・ 石器 (63～72 1:4・73～76 1:2)	25
図10 S008溝遺物出土状況図 (1:40)	図23 S008溝出土土器 (1:4)	26
図11 S013～S019ピット遺構図・断面図 (1:40)	図24 S012流路出土土器 (1:4)	26
図12 S001落ち込み・S024～S028ピット遺構図・ 断面図、S001落ち込み遺物出土状況図 (1:40)	図25 弥生時代～古墳時代の主な遺構 (1:1500)	32
図13 S006ため池遺構図・断面図 (遺構図1:60・断面図1:40)		

表目次

表1 遺物観察表 (1)	表4 遺物観察表 (4)	30
表2 遺物観察表 (2)	表5 遺物観察表 (5)	31
表3 遺物観察表 (3)		

図版目次

図版1 遺構完掘後全景 北から	図版3
図版2	1. S005凹地上層遺物出土状況 西から
1. 完掘全景 (調査区南部遺構群) 南西から	2. S005凹地下層遺物出土状況 北西から
2. S006ため池東壁土層断面 西から	図版4 出土遺物 (1)
3. S005凹地・S012流路東壁土層断面 北西から	図版5 出土遺物 (2)
4. S008溝上層遺物出土状況 東から	図版6 出土遺物 (3)
5. S008溝下層遺物出土状況 東から	

第1章 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、南部大阪都市計画事業 松原市新堂4丁目土地区画整理事業の事業地内で新たに建設される(仮称)イオンタウン松原新堂の設計が変更されたことを契機とするものである。

事業地では平成29年度(2017)に松原市教育委員会が試掘確認調査(調査番号:E7-1-59)を実施し、事業者の松原市新堂4丁目土地区画整理組合および業務代行者の戸田建設株式会社大阪支店・イオンタウン株式会社共同企業体と発見された埋蔵文化財の取扱いについて保存協議を実施している。協議後、基盤整備および店舗建設工事により埋蔵文化財の埋没保存が不可能な9,331㎡について、松原市教育委員会が(公財)大阪府文化財センターと共同で記録保存調査(調査番号:E7-1-61)を実施した。その後、令和2年度(2020)には店舗(ハンズマン棟)の設計変更により基礎部分63.7㎡の記録保存調査(調査番号:E7-1-68)を松原市教育委員会が実施している。

調査の契機となった(仮称)イオンタウン松原新堂の設計に変更が生じた時点で土地区画整理事業に伴う基盤整備が終了していたため、改めて事業者であるイオンタウン株式会社と令和4年10月21日付で埋蔵文化財保存に関する協定を締結し、10月27日付で記録保存調査の

措置が必要となる311㎡について発掘調査依頼書を受理した。その後、10月31日付で発掘調査についての覚書を取り交わし、11月1日～12月16日にかけて現地調査を実施した(実働32日)。現地調査終了後は、引き続き整理事業を実施し、令和5年6月30日に本書の刊行をもって全ての作業を終了した。

発掘調査での遺構記録方法であるが、図化はトータルステーションによる計測を主とし、遺物出土状況や調査区壁面など一部のものについてデジタルカメラの撮影画像から作成したオルソ画像を利用した。また、写真撮影にはNIKON D750を使用し、RAW形式およびJPEG形式でデータを保存した。

第2章 位置と環境

第1節 地理・歴史的環境

松原市は、大阪府の中ほどに位置する面積16.66km²の市である。市域は東西約5.8km、南北約5.1kmで、南端の丹南で標高約39m、人工河川である新大和川に接する北端の天美北で標高約10mと北へ緩やかに傾斜する。南北走る台地の間に沖積低地が広がる扇状地状の地形で、河内長野市天野山山中を水源とする西除川の左岸が泉北丘陵から伸びる泉北台地、右岸が羽曳野丘陵から伸

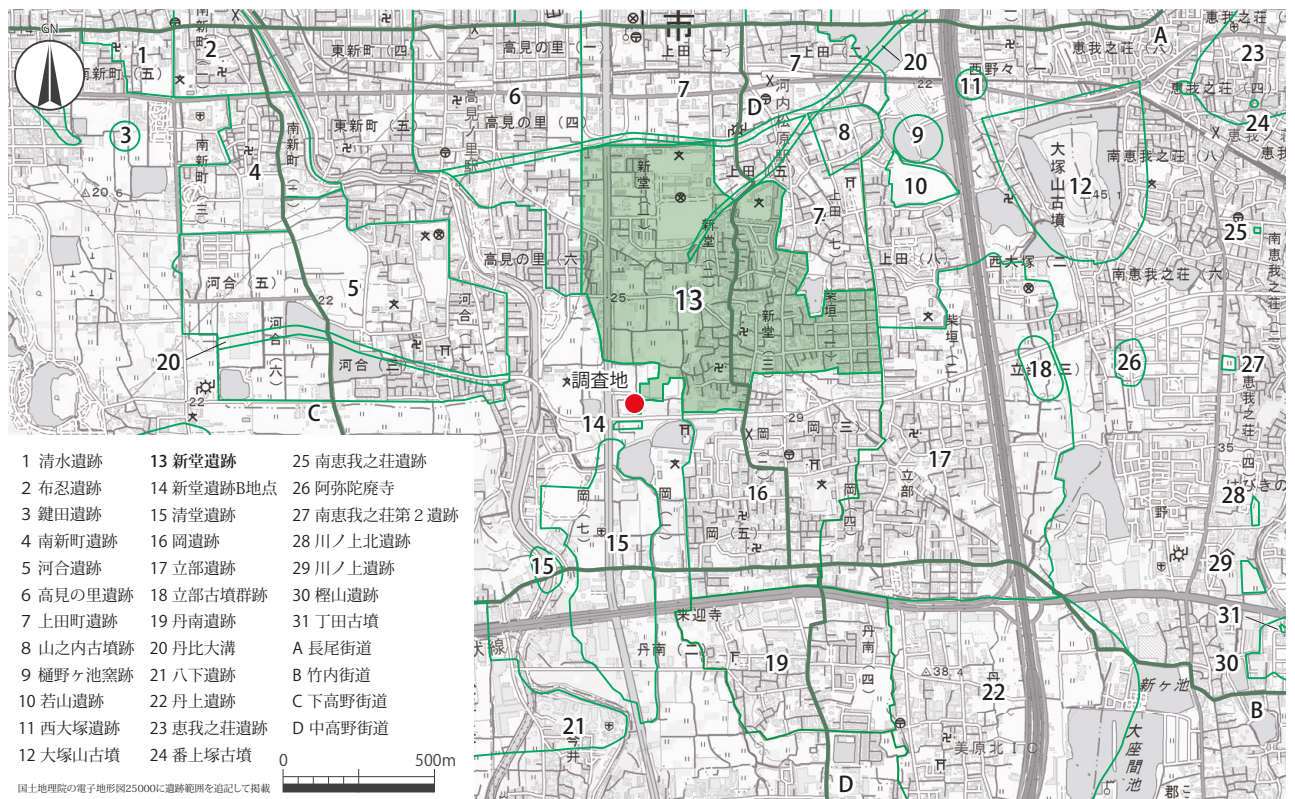


図1 新堂遺跡周辺埋蔵文化財仮蔵地分布図 (1:25000)

びる瓜破台地である。両台地は主に更新世以降の河成堆積層で形成された段丘面を成し、面上には浅い谷筋（開析谷・構造谷）や窪地が発達している。飛鳥時代より後、これらの地形を利用した段丘上を耕地化するための溜池や用水路が多く造られており、沖積低地には律令制の土地区画である条里が施工された痕跡が残る。

新堂遺跡は瓜破台地とよばれる段丘面から西側の沖積低地面にかけて広がる旧石器時代～近世の複合遺跡で、旧称は丹比柴籬宮跡および丹比新堂遺跡である（図1・2）。段丘西縁に西落ちの撓曲と思われる低い崖面が見られ、段丘上には旧河州丹北郡松原村の新堂集落が存在する。集落内には中高野街道が南北方向に通り、途中で住吉道が分岐して北西方向に延びる。また、沖積低地から段丘面にかけて飛鳥時代に開削された丹比大溝の痕跡と推定される南西～北東方向の地割が残る。さらには、足利（1985）の復元案に見られるように、西除川沿いの新しい流路帯を除いて沖積低地面に条理地割が残る。調査地には条里制を示す「七ノ坪」の小字も残る。

第2節 周辺の発掘調査成果

今回の調査地点である新堂遺跡E7-1-69の周辺で実施された発掘調査のうち旧石器時代～古墳時代の主な成果を挙げる（図2）。

旧石器時代 沖積低地面では、今回の調査地すぐ北の新堂遺跡E7-1-61でナイフ型石器が出土し、そこから北西約300mの新堂遺跡・高見の里遺跡D6-4-7（未報告）で削器などが出土している。また、調査地南西の清堂遺跡D8-2-3（未報告）では、ナイフ型石器・削器・搔器・石核などが出土している。段丘面では、調査地南側の岡遺跡（府1992）でナイフ形石器・縦長剥片・石核などが出土している。いずれも包含層出土資料である。

縄文時代 沖積低地面では、今回の調査地すぐ北にあるE7-1-61で晩期の深鉢が出土している。また、そのすぐ北西の地点（府S55）では晩期の深鉢と石棒が出土している。さらに、北約128mの地点（府2005-6）からは晩期の焼土塊が出土しており、D6-4-7・D6-2-8（未報告）からも石器が出土している。これらの遺物は、粘土塊を除きいずれも包含層からの出土である。調査地点より南西の清堂遺跡D8-2-3では晩期の土器と石匙などの石器が出土している。

段丘面では、崖面にあたるE7-3-7で石器が出土している。また、調査地南東の岡遺跡（府H4）では包含層から凹基式石鏃が出土している。

弥生時代 今回の調査地点すぐ北にあるE7-1-61で

は、中期の石器を伴う土坑が検出されており、包含層から石器と土器が出土している。また、後期～末の竪穴建物や井戸が検出されている。

図2より北側の新堂遺跡、上田町遺跡、高見の里遺跡では、後期～庄内式期にかけての遺構・遺物が複数地点で確認されている。また、調査地点より南西の清堂遺跡D8-2-3では包含層から石器と中期～後期の土器が出土している。段丘面では、崖面で中期の溝が検出されているのみで実態は不明である（府9）。

古墳時代 今回の調査地点すぐ北にあるE7-1-61では、弥生時代中期～古代の遺物を含む流路が検出され、包含層からは前期～後期の円筒埴輪が出土している。また、さらに北東のE6-3-4では流路内から木橋が出土し、後期～飛鳥時代の須恵器と後期の埴輪を伴う。段丘面では、遺物が散見されるが飛鳥時代以前の建物遺構は未確認である。調査地南東の岡遺跡（府H4）では、古墳の周溝と後期の円筒埴輪が確認されている。

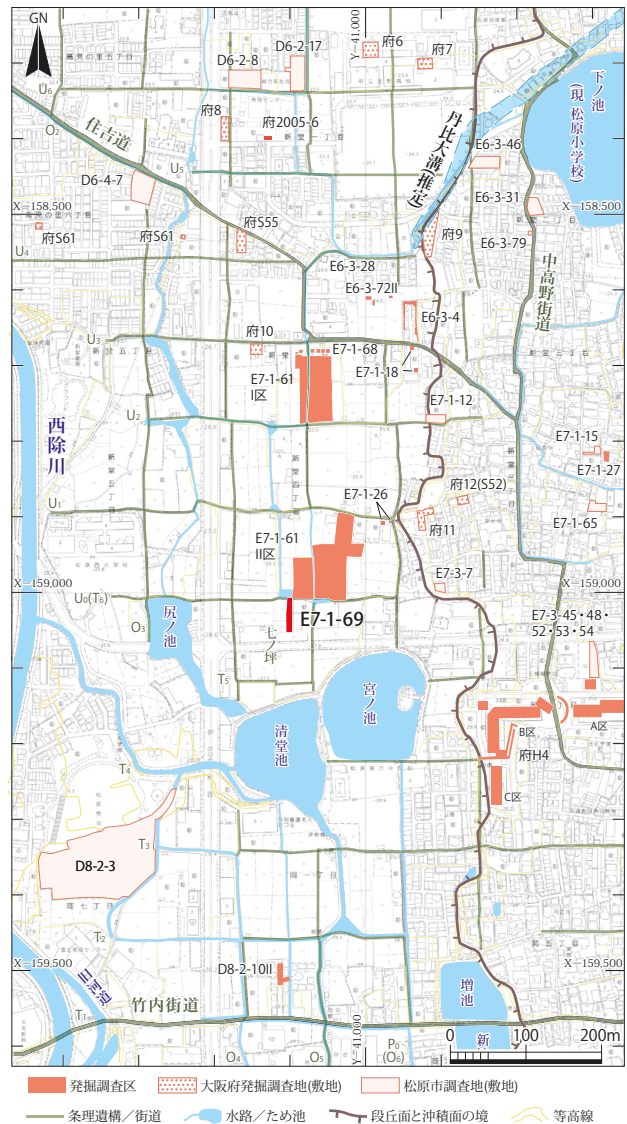


図2 調査地および周辺主要調査地位置図 (1:10000)

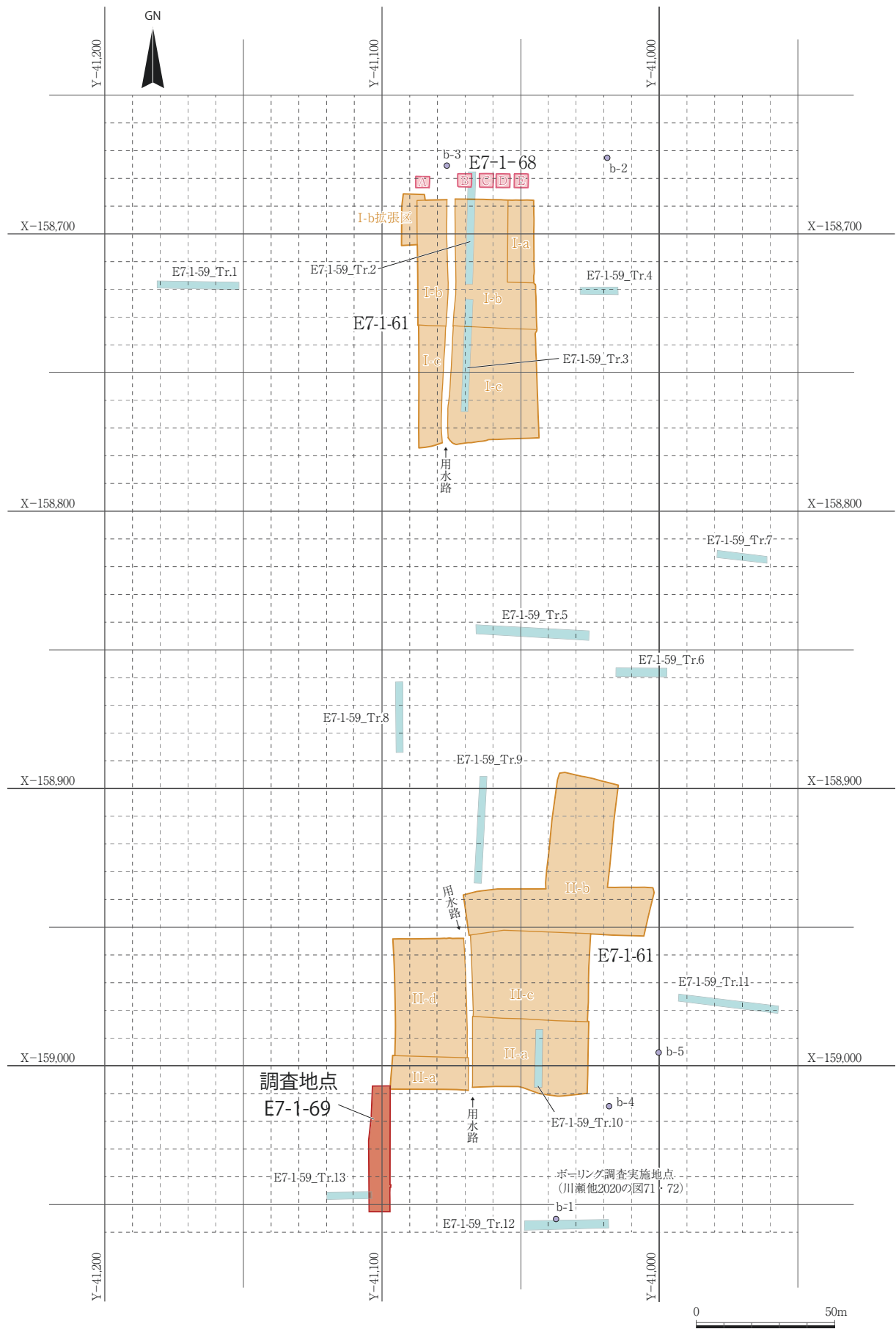


図3 発掘調査位置図 (1:2000)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

第1層 近現代の作土層で、土地区画整理事業の鋤取り整地によりほぼ残っていない。平成29年度の試掘確認調査時は(図3のTr.13)作土層が標高26.5mまで堆積し、その上に標高27.0mまで盛土が施されていた。第1-1層は耕耘により攪乱された褐灰色(10YR5/1)・緑灰色(5G6/1)中砂～極粗砂混じり極細砂で、下部は溶脱により淡色となる。調査区北端のS006ため池を耕地に転用した場所でのみ確認されている。第1-2層はにぶい褐色(7.5YR7/3)中砂～極粗砂混じり細砂の耕盤で、上層から溶脱した鉄が層状に集積している。

第2層 既往調査の古代～中世の遺物を含む中近世作土層(E7-1-61Ⅱ区第2層)に対比される厚さ0.2mほどの作土層である。X-159,037mより南側は、土地区画整理事業の鋤取り整地により残っていない。本来、南側は一段高い耕作地であったと考えられる。2層に細分可能で、上層の第2-1層はにぶい橙色(7.5YR7/3)中砂～細礫混じり極細砂で、点状マンガン斑が多く認められる。下層の第2-2層は褐灰色(10YR6/1)わずかに中砂～細礫混じり細砂である。土器と思われる2cm未満の赤褐色碎片を少量含むが、時期不明である。調査区北半では、本層下面に帰属する農耕具痕S029～S031が検出されている。第1・2層からはそれぞれ下に0.3mほど根跡が伸びその周辺に班鉄が集積している。

第3層 シルト～極細砂を主体とする有機物を含み暗色化した泥質堆積物で点状マンガン斑が多く認められる。既往調査の弥生時代中期～古代包含層(Ⅱ区第3層)に対比される。X-159,036mの第5～7層を基盤とする斜面から南は堆積が厚く、2層に細分される。上層の第3-1層は厚さ0.1～0.3mの灰黄褐色(10YR6/2)・褐灰色(10YR4/1)わずかに極粗砂～細礫混じり極細砂である。調査区全体で確認され、南側ほど土器・炭化物・礫を含む量が多く、北に向かって側方細粒化する。S004溝(図5の30m)以南は確実に土壤生成作用を受けている。なお、この層では南北20mほどの範囲(図5の5～25m)で上層から落ち込むシルトが観察できる(図4)。これについては井上智博氏にご教示いただき、上層からシルトが回転しながら丸く落ち込み、落ち込んだシルトが互いに切合わないことを平面で確認できたため、地震動による含水塑性変形ユニット(松田1996,1997)と判断した。上部の地震発生層序は耕耘で攪乱されており、庄内式期以降のどの時点で発生したか不明であ

る。下層の第3-2層は厚さ0.1～0.4mのにぶい黄褐色(10YR6/3)・褐灰色(5YR5/1)シルトで、S005凹地の直上に土器・炭化物・礫を含む。

第4層 標高25.9m以下の流路充填堆積と氾濫堆積物を一括して第4層とした。S012流路が南へ側方移動しながら埋積し、最終的に凹地として残ったものと考えられ、S005・S010凹地が最上部の堆積である。調査区南半にある弥生時代後期後半～庄内式期の遺構を覆うような側方への氾濫堆積は認められない。下刻深度は標高24.5mよりも深く、浸食開始時期は未確認である。堆積は上方細粒化しており、4層に細分できる。第4-1層は灰白色(10YR8/1)～褐灰色(10YR6/1)細砂～粘土で、S005凹地南側(図2の10～20m部分)の堆積が粗粒である。第4-2層は上層と同色の砂泥互層で、流路最終堆積と考えられる。第4-3層は灰白色(10YR7/1)・にぶい黄橙色(10YR7/4)粗砂～細礫混じり細砂で複数の植物遺体薄層を挟み葉理が顕著である。斜面(流路南肩)に堆積した植物遺体の放射性炭素年代は庄内式期(1890±20BP)を示す。第4-4層は植物遺体層である。第4-5層は灰白色(10YR8/1)中礫または極粗砂～細礫が主体の砂礫層で、斜向葉理が顕著である。今回の調査では、第4層分布域のみ第3層上面を第1面、第4層上面を第2面として調査している。

第5～7層 S005・S010凹地から南側に分布する層で、S012流路に浸食されている。帰属時期は弥生時代後期よりさかのぼる。第5層はやや不明瞭であるが2層に分かれ、第5-1層は第3-1層の母材となった灰白色(10YR8/1)極細砂～シルトで、鉄・マンガン斑が非常に富む。今回の調査では、本層上面を調査面とした。第5-2層は上層よりも砂質の堆積である。第6層は、第6-1層がにぶい黄橙色(10YR7/2)砂礫層で、中礫主体層と極粗砂～細礫主体層が互層となったトラフ型斜向層理と考えられる。その下の第6-2層は明青灰色(5B7/1)中砂～シルトである。第7層は明青灰色(5B7/1)粘土で、上層の泥質堆積と違い非常に固く締まっているため更新世の堆積物と考えられる。



図4 第3層上面の地震動による変形構造

第2節 検出遺構

遺構は調査区内で29基検出されており、内訳は土坑1基、溝7条、井戸1基、ため池1基、ピット15基、落ち込み1基、凹地2つ、流路1本である。Y-41,100mのラインから西側は全て標高25.6mあたりまで攪乱され、第1～3層と第4・5層の各一部は破壊されている。そのため、検出遺構が本来帰属していた面は不明である。

以下、遺構種別ごとに遺構番号順で記述していく。

土坑

S020土坑（図7） 調査区中央東部のS010凹地完掘後に第4-1層上面で検出された平面が楕円形の土坑で、南北方向1.17m・東西方向1.37m以上・深さ0.13mを測る。遺構の東側は調査区東壁にかかる。遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

溝

S002溝（図7・8・10） 調査区中央東部から調査区南東部にかけて検出された南北に延びる溝で、北側のS005凹地がある斜面下への排水路として掘削された可能性がある。長さ7.26m以上・幅0.79m・深さ0.37～0.40mを測り、南側はやや西方向へ折れる。西側は後世に削平されているため、全長は不明である。S003溝・S008溝を切り、S004溝・S010凹地に切られる。掘形はV字に近い逆台形状で、底面の堆積は加工時形成層と考えられる。遺物は後期後葉の弥生土器片と須恵器が出土している。S004溝に切られるため、須恵器は上層から混じり込みと考えられる。

S003溝（図7・8） 調査区中央東部で検出された東西に延びる溝である。長さ2.46m以上・幅0.48m・深さ0.39mを測る。西側は後世に削平され、S002溝・S004溝に切られるため、全長は不明である。弥生土器と須恵器が出土しているが、S002溝と同様に須恵器は上層から混じり込んだものと考えられる。

S004溝（図7・8） 調査区中央東部の第3-1層下面で検出された東西に延びる溝である。長さ3.48m以上・幅0.57～1.14m・深さ0.37mを測る。東側は調査区外まで延び、西側は後世に削平されているため全長は不明である。S002溝・S003溝を切る。遺物は弥生時代後期後葉～庄内式期の土器が出土している（図17）。

S008溝（図9） 調査区南東部で検出された北西から南東に延びる平面L字の溝である。南北長3.43m・東西長2.07m・幅1.5m・深さ0.26mを測る。北側はS002

溝に切れ東側は調査区外まで延びるため全長は不明である。S001落ち込みを切る。検出時はS009と並ぶ別遺構としたが最終的に同一遺構と判明した。遺物は弥生時代後期後半～庄内式期の土器が出土している（図23）。

S029溝（図6） 調査区中央部の第2-2層下面で検出された南北に延びる溝である。南北方向2.79m以上・東西方向0.42m・深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。S005凹地が完全に埋没し条里が施工され耕地となった古代以降に帰属する耕具痕と考えられる。

S030溝（図6） S029溝の北側の第2-2層下面で検出された南北に延びる溝である。南北方向1.27m・東西方向0.36m・深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。S029・S031溝と一連の耕具痕と考えられる。

S031溝（図6） S006ため池の南側の第2-2層下面で検出された南北に延びる溝である。南北方向7.42m・東西方向0.48m・深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。埋土はS029、S030と同じく第2-2層の作土であるため耕具痕と考えられる。S029～S031溝の底は標高25.89～26.0mで第3層中にとどまる。

井戸

S007井戸（図9） 調査区ほぼ南端で検出された平面形状が楕円形の井戸で、直径が東西方向1.2m・東西方向1.16m・深さ0.58mを測る。井戸枠は確認できず素掘り井戸と考えられる。井戸底の水溜め部は砂礫層（第6-1層）である。遺物は弥生土器の破片が出土している。攪乱の影響により第5層内で検出したが、元来は第3層内遺構で深さは0.8mほどであったと考えられる。また、掘形の上部のみが南方向に歪んでいることから、地震の影響を受けた可能性も考えられる。

ピット

S013ピット（図11） 調査区南部で検出され直径0.25m・深さ0.07mを測る。時期不明の土器片が出土している。S013～S019ピットは全て第5層内で検出されたが削平を受けており本来の帰属面は不明である。

S014・S016・S018ピット（図11） 調査区南部で検出されたピット列で規模は直径0.22～0.28m・深さ0.07～0.12mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S015・S017・S019ピット（図11） 調査区南部で検出された北東-南西方向のピット列で規模は直径0.24～0.34m・深さ0.1～0.2mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S021ピット（図7・8） 調査区南部、S002溝の東

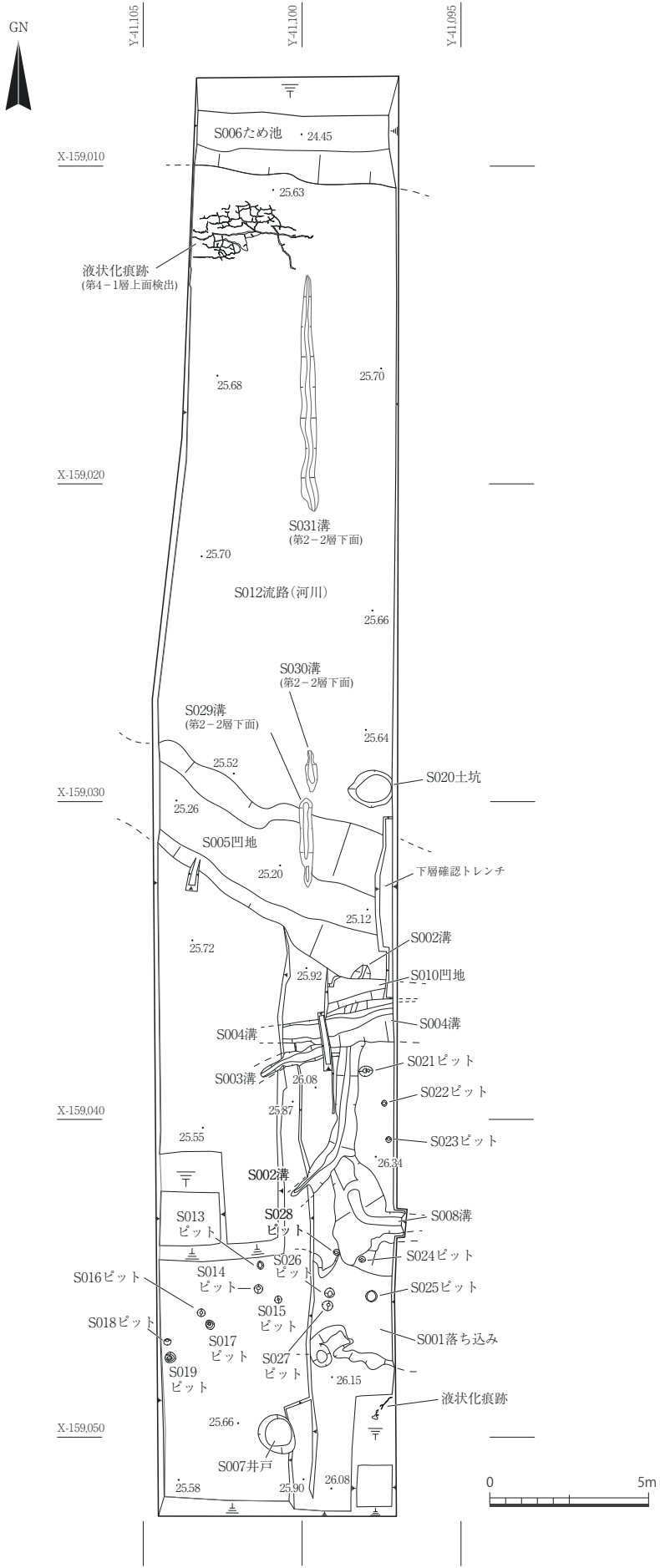


図6 全体遺構図 (1:200)

側で検出され、直径0.32～0.42m・深さ0.19mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。S021～S023ピットは第5-1層上面に帰属する。

S022ピット (図7・8) 調査区南部、S021の南東で検出され、直径0.19m・深さ0.22mを測る。摩滅が激しい時期不明の土器片が出土している。

S023ピット (図7・8) 調査区南部、S022ピットの南側で検出され、直径0.18m・深さ0.09mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S024ピット (図12) 調査区南部、S001の完掘後の北側肩で検出され、直径0.2m・深さ0.26mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S025ピット (図12) 調査区南部、S001落ち込み底面で検出され、直径0.36m・深さ0.06mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S026ピット (図12) S001落ち込み底面で検出され、直径0.3m・深さ0.14mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S027ピット (図12) S001落ち込み底面で検出され、直径0.32m・深さ0.18mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

S028ピット (図12) S001落ち込み底面で検出され直径0.19m・深さ0.2mを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

落ち込み

S001落ち込み (図12) 調査区南東部の第3-1層内で検出され、南北方向3.99m・東西方向2.44m以上・深さ0.34mを測る。遺構の東側は調査区外まで延び、西側は後世に削平を受け消滅している。そのため全体像は不明である。北側の一部をS008溝に切られている。完掘後に遺構の底面や壁面からS024～S028ピットを検出した。底部の埋土は遺構面基盤層の偽礫が混じるため加工時形成層と思われる、土坑や竪穴建物であった可能性も考えられる。遺物は弥生時代後期後半の土器が出土している(図17)。

凹地

S005凹地 (図14・15・16) 調査区中央部の第4-1層上面で検出された南東-北西方向の自然遺構である。南から西に向かって流れるS012流路(図5の第4層)の痕跡と考えられる。規模は長さ8.05m以上・幅3.67～4.84m・深さ0.32mを測るが堆積を誤認して肩部から底面を余分に掘削したため遺構の規模が一回り大きくなっている。調査区東壁断面で確認できる規模は肩部幅

1.8m・底面幅1.0mで、完掘後に底面を観察したところ西側に向かいやや幅が広がっていたと考えられる。調査区外へと遺構が更に広がるため全体像は不明である。S002溝などが検出された第5-1層上面との比高差は約0.8mである。凹地内の泥質堆積物は上下2層に分かれ、弥生時代後期後半～庄内式期の土器がまとまって出土している(図19～22)。

S010凹地 (図7・8) 調査区中央東部の第4-1層上面および第5層上面で検出された自然遺構である。遺構の東側は調査区外まで広がり、西側は削平を受けている。第5層上面の南北方向0.78m・東西方向2.04mの範囲以外は第4-1層上部の鉄斑紋帯下面まで一気に掘り下げたため、正確な平面形状をとらえることができなかった。第5層の段丘崖斜面から北側に広がるが、南の肩部は不明瞭である(図6の22.4～29.7mの範囲)。庄内式期のS005凹地埋没後に形成された遺構であるため、出土した弥生時代後期の土器片は南側の段丘崖上にある遺構と古土壌から流入したものと考えられる。

流路(河川)

S012流路 (図6) S005凹地完掘後に南北約10mの長さで掘削した下層確認トレンチ内で確認した自然流路である。掘削底の標高24.5mで流路底は確認できておらず、平面形状も捉えられていない。X-159,036mの第5～7層を基盤とする段丘崖斜面下から調査区北端までの約30mの範囲に分布する堆積物は、流路に関連するものである。西向きの流路は左岸(南側)に側方移動し、庄内式期には放棄され凹地化したと考えられる。堆積は掘削底の中礫を主体とする礫質砂からシルトへと上方粗粒化し、一部で植物遺体層が見られる。遺物は弥生時代後期の土器が出土している(図24)。北側に隣接する調査地(E7-1-61区)で検出された流路S0034及び下層流路との関係については、改めて検証が必要である。

ため池

S006ため池 (図13) 調査区北端で検出され、南北方向2.14m以上・東西方向6.78m以上・深さ0.77～1.47mを測る。北、東、西側は調査区外まで延びる。北側の調査(E7-1-61 II-a区)では、ため池の北端が検出されている。検出されたため池の南側法面は、S012流路(図5の第4層)の砂質堆積物が崩落しないよう部分的に偽礫混じりの土で補強されている。機能時に堆積した泥層の最上部から近世の磁器が出土しており(図17-5)、北側の調査成果と齟齬はない。埋め立て後は耕作地に転用されている。

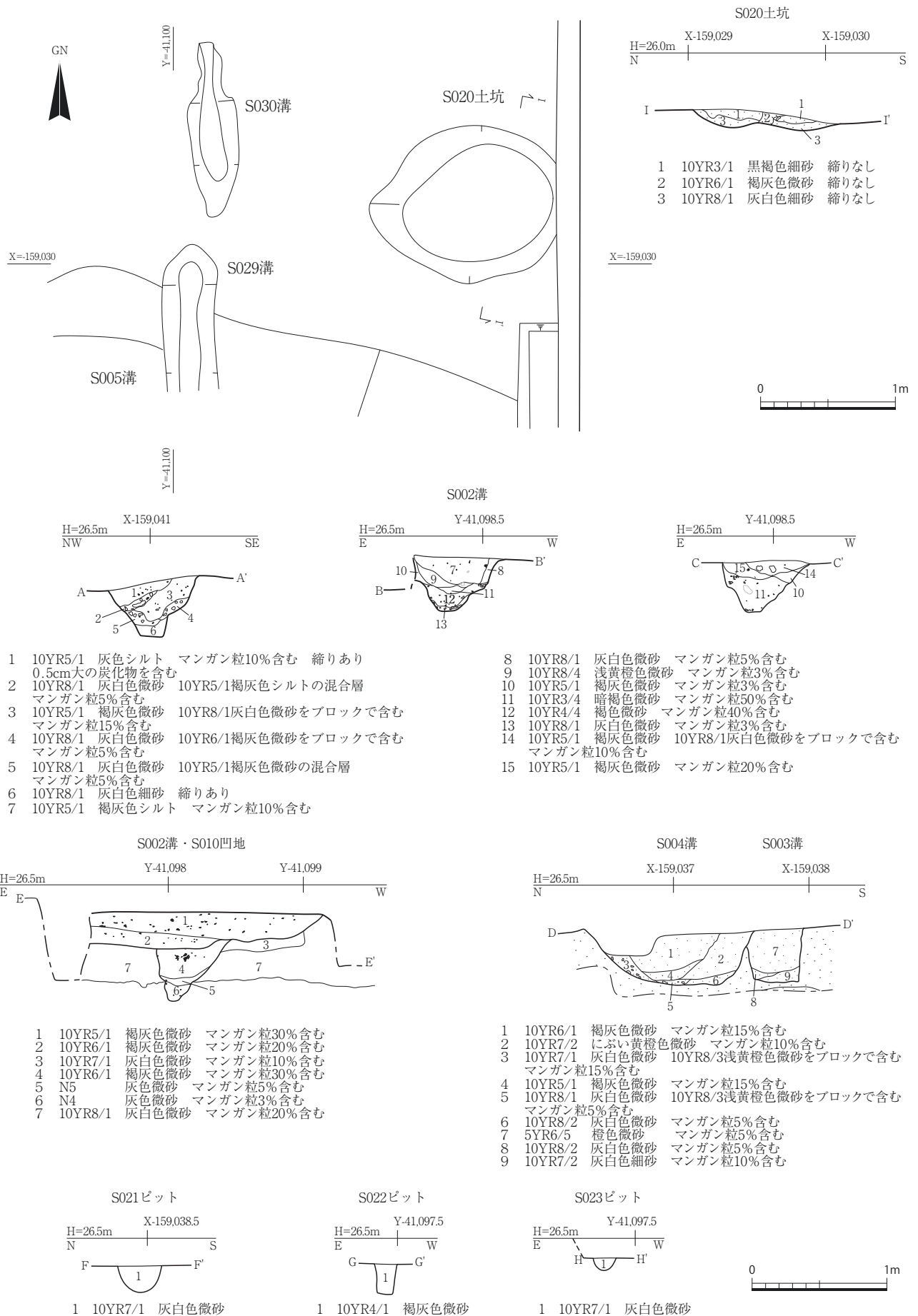


図7 S002～S004溝・S010凹地・S021～S023ピット断面図、S020土坑遺構図・断面図 (1:40)

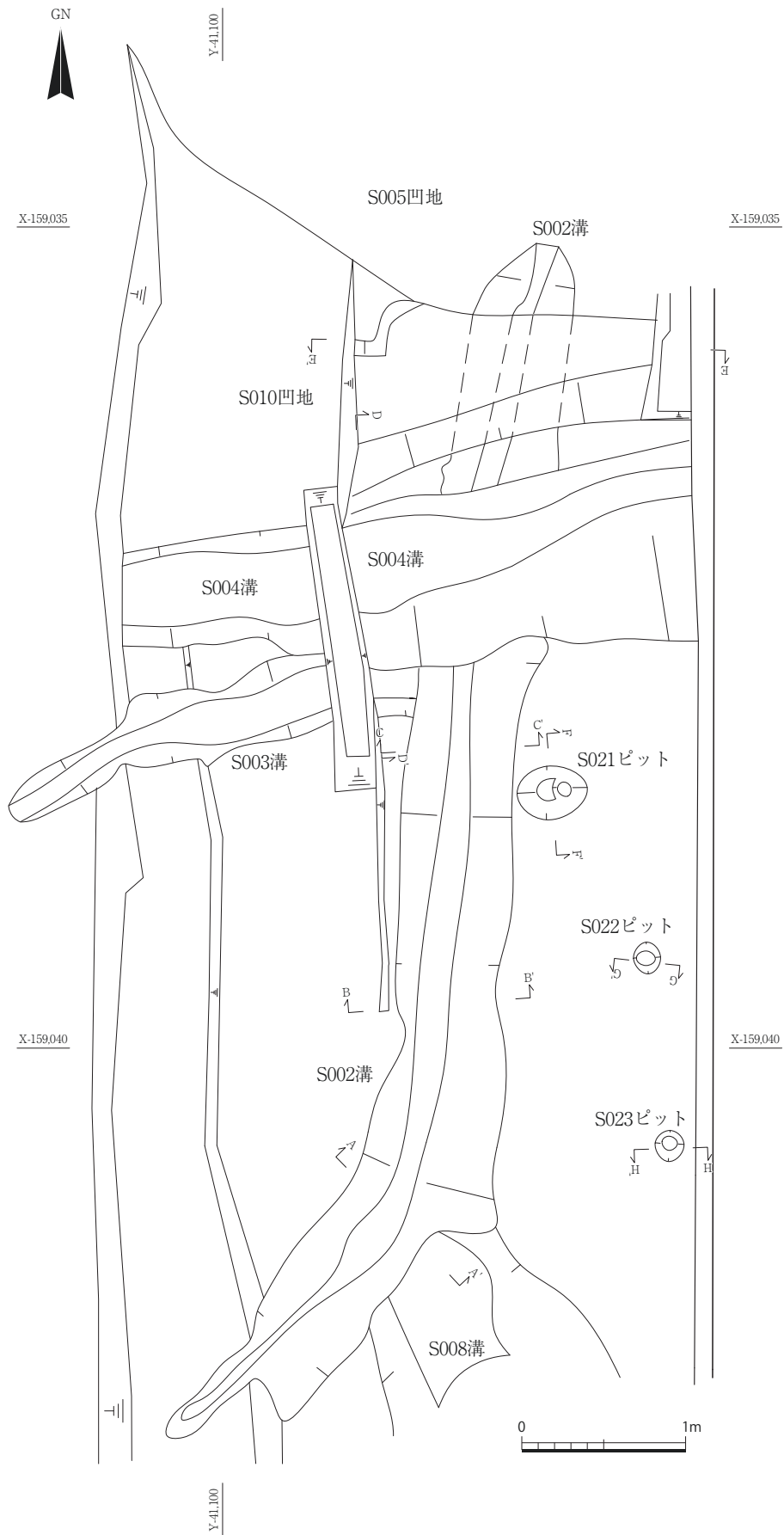


図8 S002～S004溝・S010凹地・S021～S023ピット遺構図 (1:40)

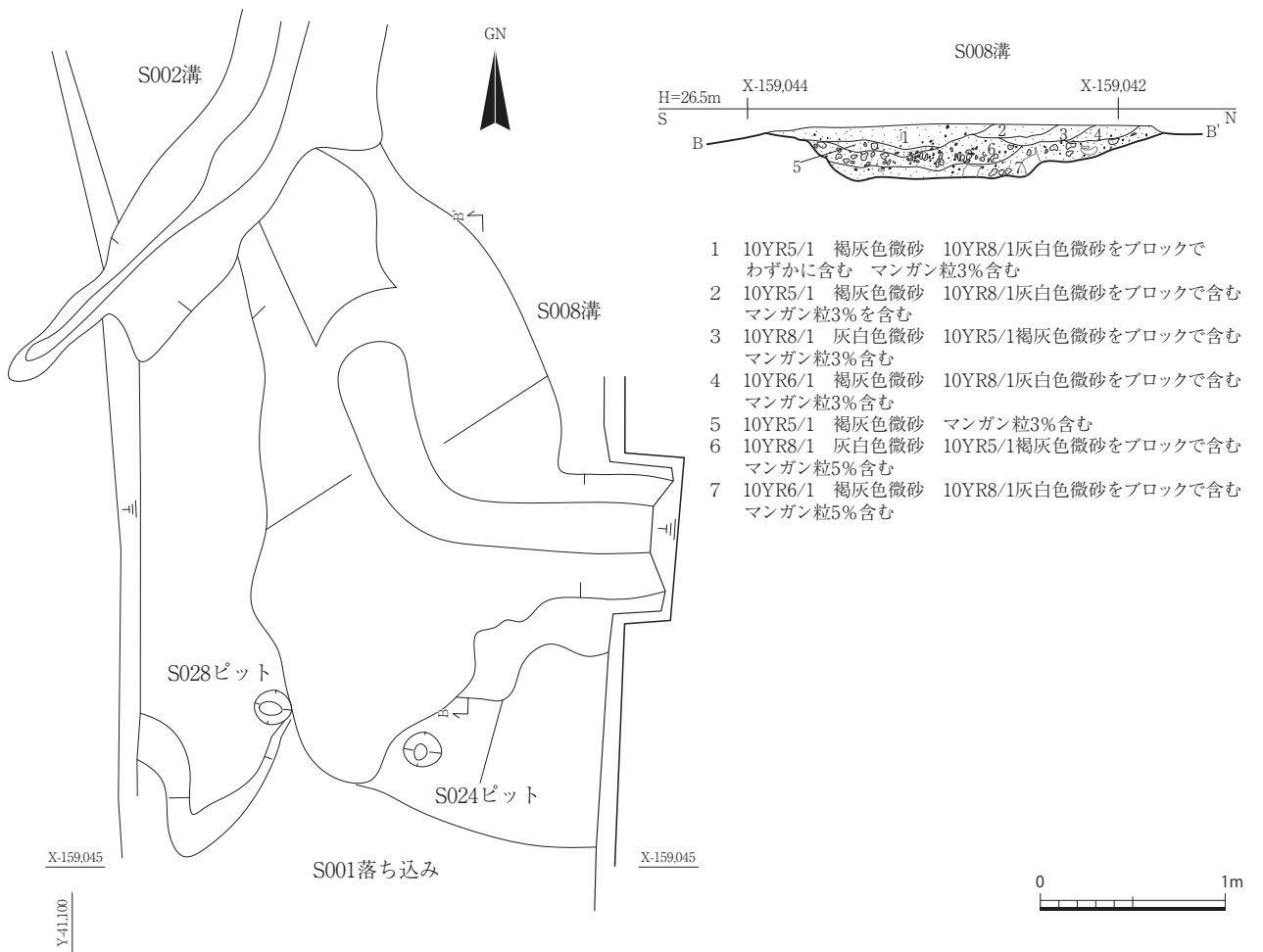
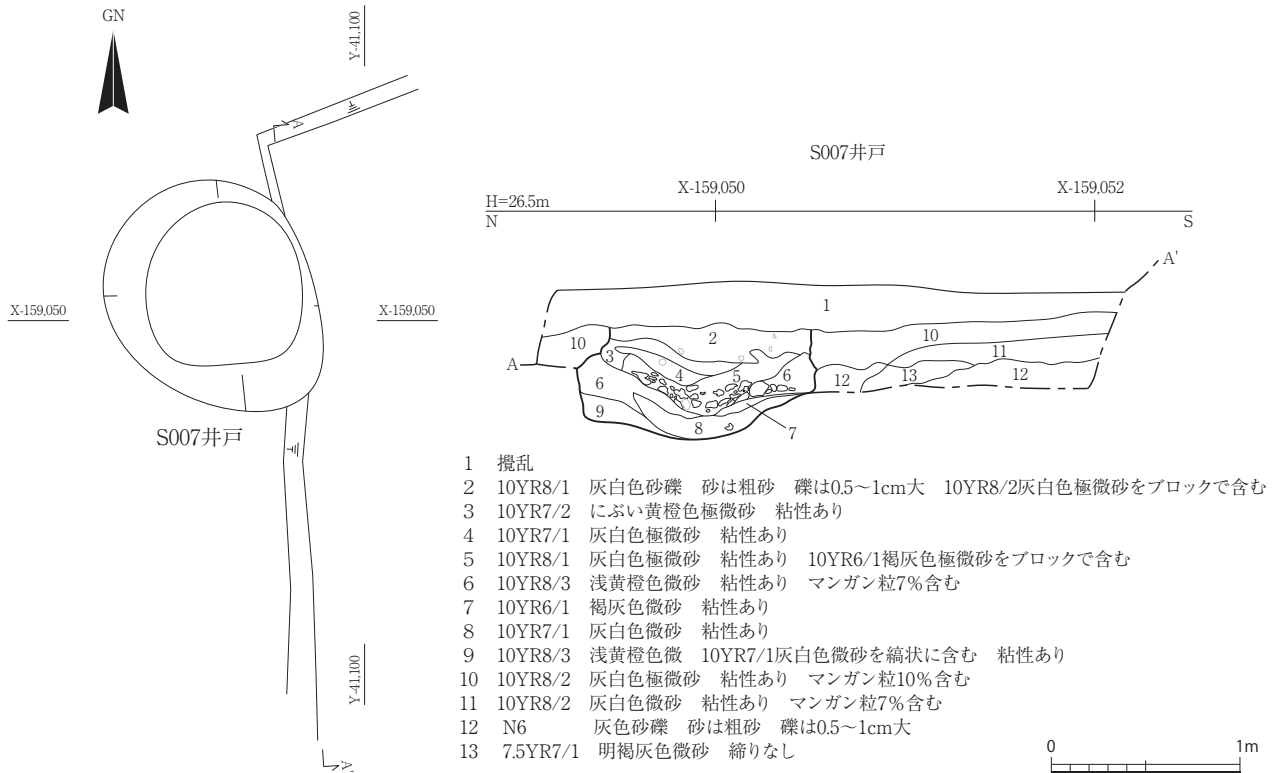


図9 S007井戸・S008溝遺構図・断面図 (1:40)

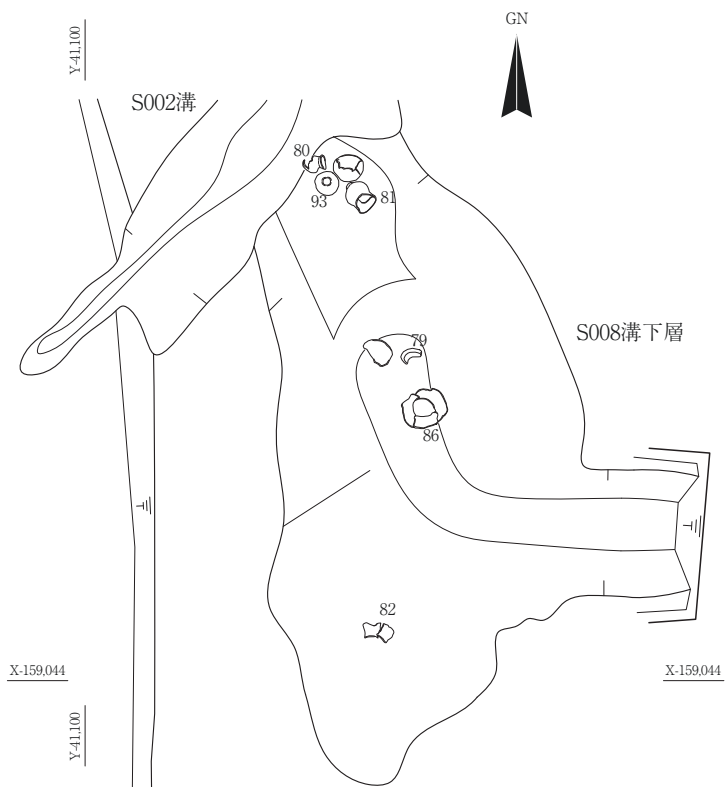
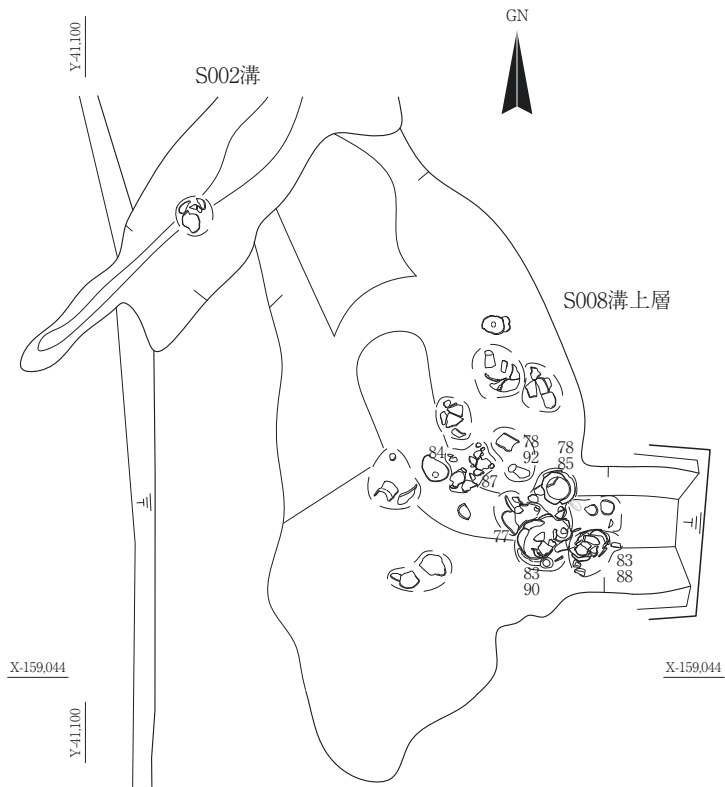


図10 S008溝遺物出土状況図 (1:40)

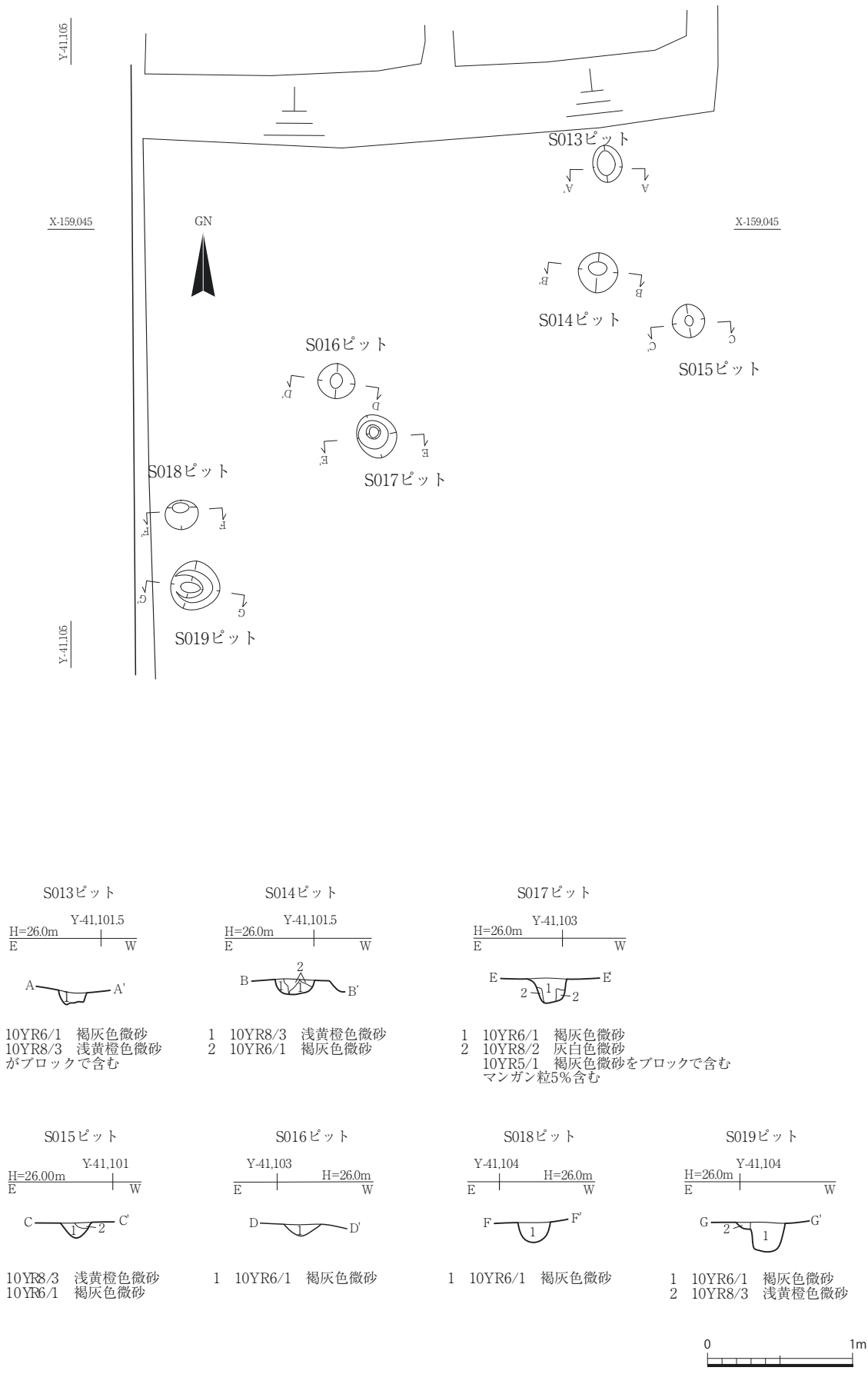


図11 S013～S019ピット遺構図・断面図 (1:40)

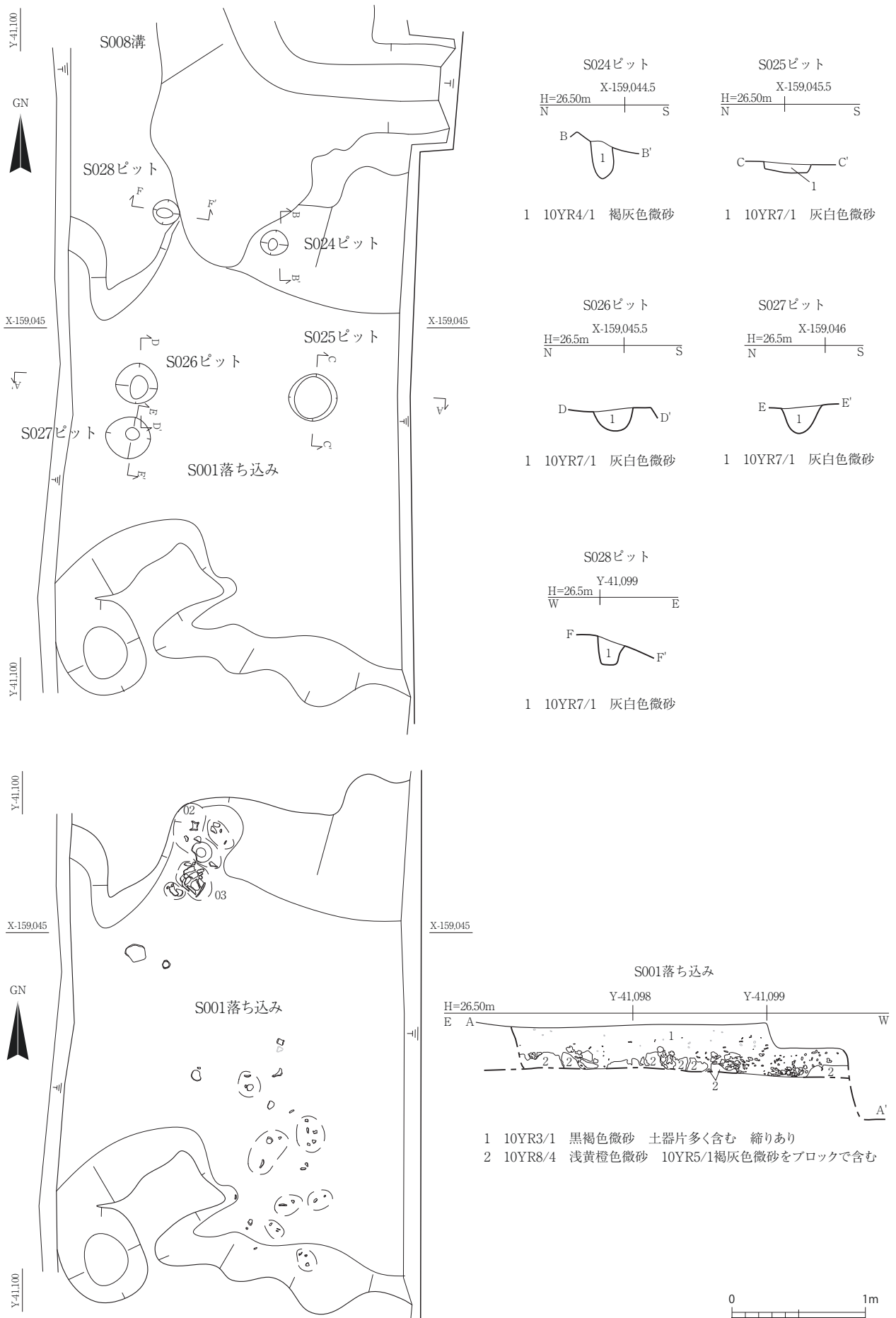


図12 S001落ち込み・S024～S028ピット遺構図・断面図、S001落ち込み遺物出土状況図 (1:40)

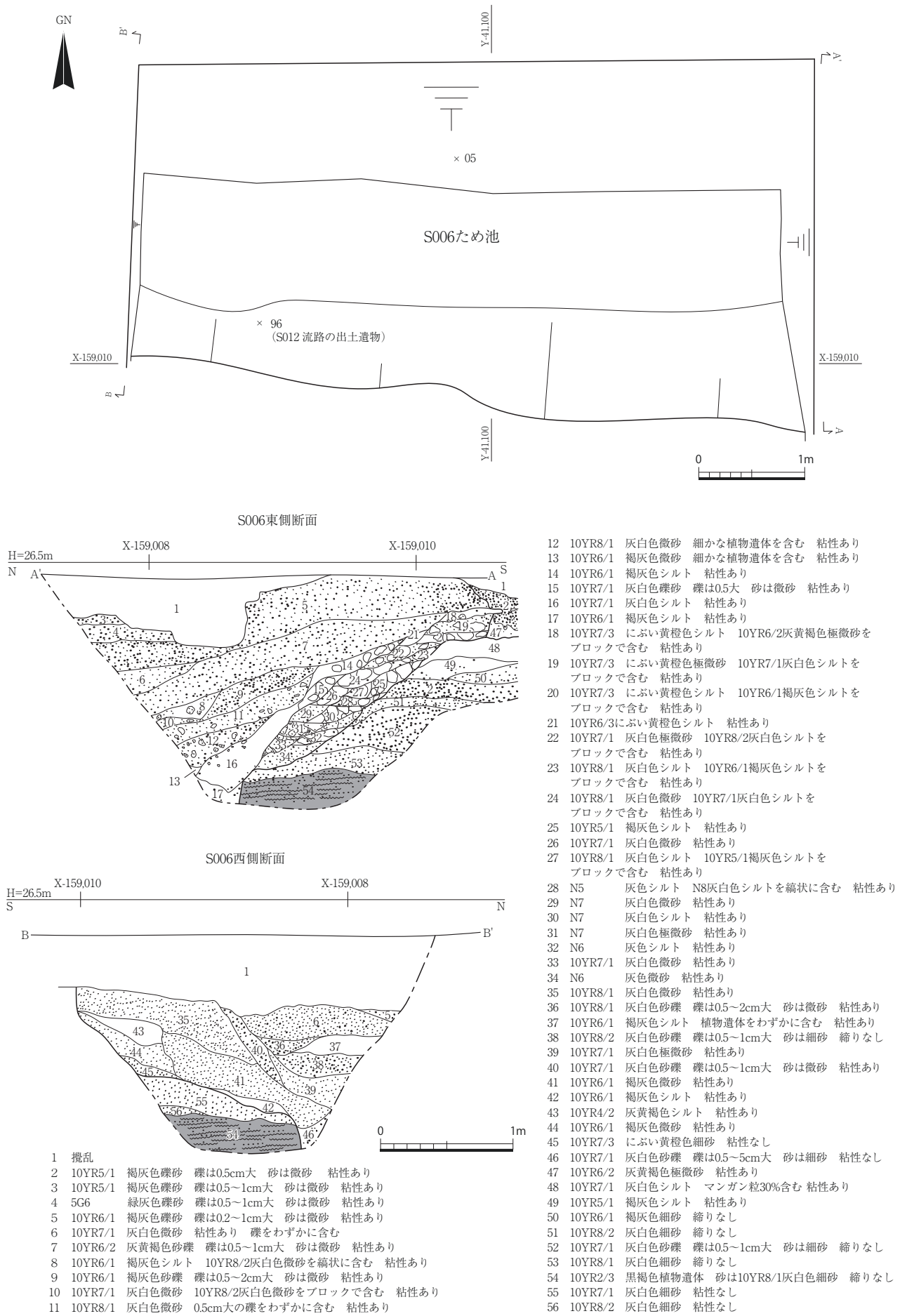


図13 S006ため池遺構図・断面図 (遺構図1:60・断面図1:40)



図14 S005凹地上層遺物出土状況図 (1:40)

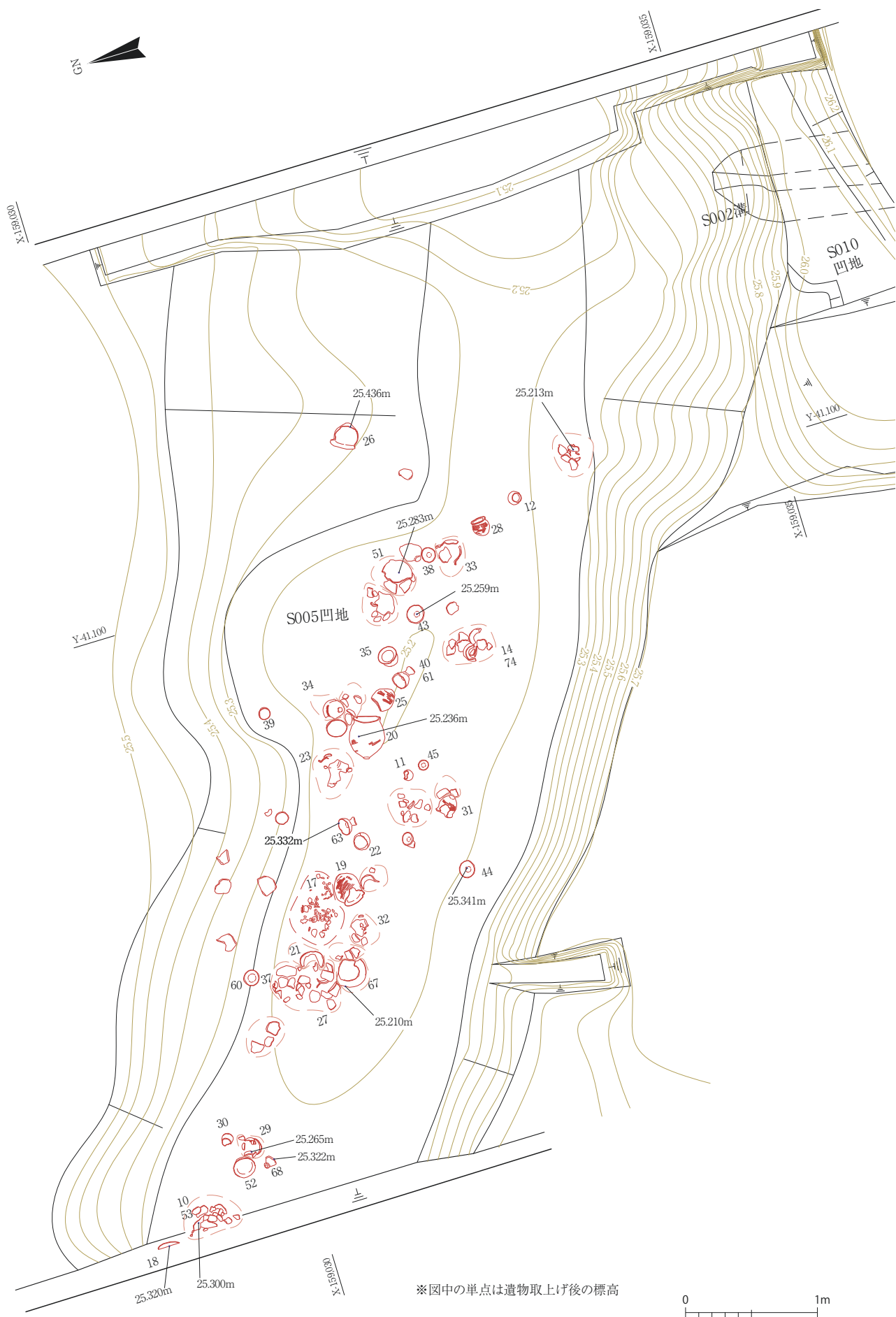
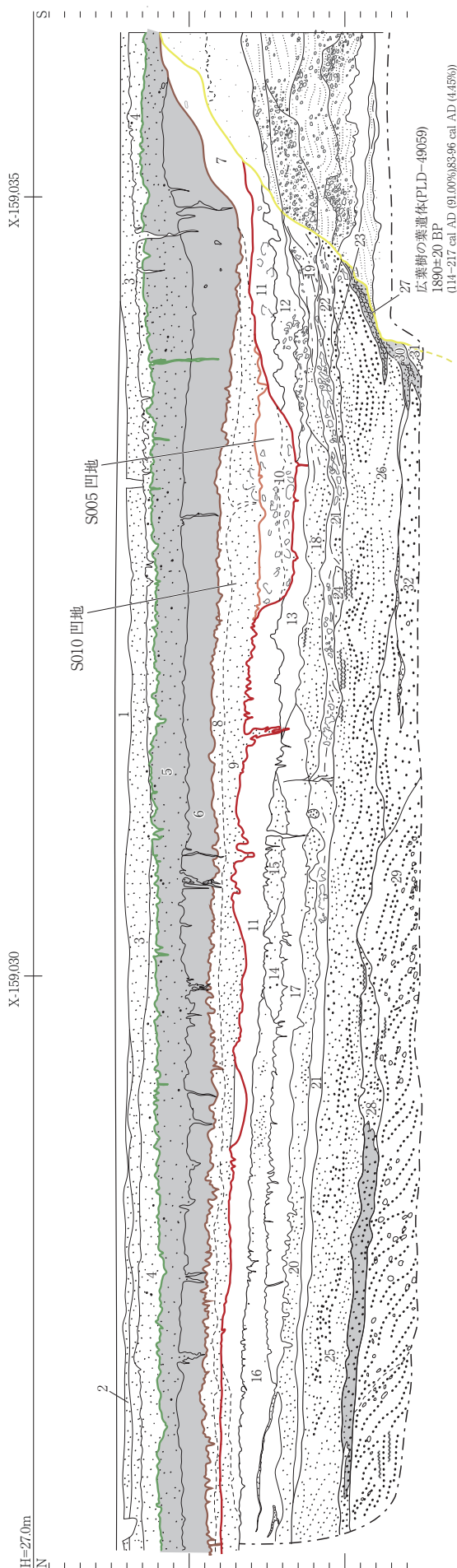


図15 S005凹地遺構図・下層遺物出土状況図 (1:40)



1890±20 BP
(114-217 cal. AD (91.00%)83.96 cal. AD (4.45%))

- | | |
|--|--|
| 1 盛土および攪乱 | 17 10YR6/1 褐灰色微砂 粘性あり (第4-2層) |
| 2 7.5YR6/3 にぶい褐色微砂 締りあり (第1-2層) | 18 10YR8/1 灰白色砂礫 礫は0.5cm 砂は微砂 粘性あり (第4-2層) |
| 3 7.5YR7/3 にぶい橙色極微砂 マンガン粒5%含む 締りあり (第2-1層) | 19 10YR6/1 褐灰色微砂 粘性あり (第4-2層) |
| 4 10YR6/1 褐灰色微砂 マンガン粒3%含む 締りあり (第2-2層) | 20 10YR8/1 灰白色粗砂 (第4-2層) |
| 5 10YR6/2 灰黄褐色極微砂 粘性あり 暗色帯 (第3-1層) | 21 10YR7/1 灰白色シルト 粘性あり (第4-2層) |
| 6 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 暗色帯 (第3-2層) | 22 10BG6/1 青灰色シルトをブロックで含む10YR6/1褐灰色微砂 (第4-2層) |
| 7 10YR5/1 褐灰色微砂 マンガン粒30%を含む (S010凹地) | 23 10YR7/2 にぶい黄褐色微砂 粘性あり (第4-2層) |
| 8 10YR7/1 灰白色シルト～微砂 マンガン粒30%含む 酸化激しい 粘性あり (S010凹地) | 24 10YR7/2 にぶい黄褐色微砂 粘性あり (第4-2層) |
| 9 10YR8/1 灰白色シルト～微砂 粘性あり (S005凹地) | 25 10YR7/1 灰白色細砂 (第4-3層) |
| 10 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性あり (S005凹地) | 26 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂 (第4-3層) |
| 11 10YR8/1 褐灰色シルト 粘性あり 西側に向かい粗粒化 (第4-1層) | 27 10YR3/1 黒褐色黒褐色砂と植物遺体の互層 |
| 12 10YR8/1 灰白色砂礫 礫は0.2~0.5cm 砂は細砂 (第4-2層) | 28 10YR6/1 褐灰色砂礫 礫は0.2~0.5cm 砂は細砂 植物遺体含む (第4-4層) |
| 13 10YR6/1 褐灰色微砂 5B7/1明青灰色シルトをブロックで含む 粘性あり (第4-2層) | 29 10YR8/1 灰白色粗砂混じり礫 礫は0.2~0.5cm (第4-5層) |
| 14 10YR8/1 灰白色細砂 (第4-2層) | 30 10YR3/1 黒褐色砂と植物遺体の互層 (第4-5層) |
| 15 5B5/1 青灰色微砂 粘性あり (第4-2層) | 31 10BG6/1 青灰色細砂 (第4-5層) |
| 16 10YR8/1 灰白色微砂 締りあり (第4-2層) | 32 10YR8/1 灰白色砂礫 礫は0.2~0.4cm 砂は極粗砂 (第4-5層) |

図16 S005・S010凹地断面図 (1:40)

第3節 出土遺物

新堂遺跡E7-1-69の発掘調査で出土した遺物は、資料整理用のコンテナ(内寸:540×386×150mm)にして30箱が出土した。遺物は水洗・注記・分類・接合を行った後、残存率50%を超えるものを選んで図化するるとともに、出土点数が少ない器種については小破片でも図化することを心掛けた。なお、詳しい土器の調整などは、遺物観察表(表1~4)にまとめている。

S001 落ち込み出土遺物(図17) 弥生土器の壺、甕、高坏、鉢などが出土しており、壺は広口壺、直口壺、二重口縁壺、甕は小型のものや底部、高坏の脚部、鉢は脚台鉢が出土している。図化可能なものは01・02広口壺、03甕である。01は口縁部のみが残存している。02は口縁部から頸部が残存しており、口縁は大きく外反する。03は口縁部から体部が残存している。出土した土器は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

S002 溝出土遺物 弥生土器の壺、甕、手焙形土器、高坏、鉢などが出土しており、壺は長頸壺などの口縁部・体部、底部、甕は口縁部や底部、手焙形土器は体部、高坏は脚部、有稜高坏や椀形高坏の坏部、鉢は平底の有孔鉢や脚台鉢が出土している。いずれも小破片で摩滅が著しく、図化可能なものはなかった。出土した土器は、特徴から弥生時代後期後半に位置づけられる。

S003 溝出土遺物 弥生土器の壺、甕、高坏、石器などが出土しており、壺は体部、甕は口縁部や体部・底部、高坏は脚部や有稜高坏の坏部、石器は打製石鏃の破片1点が出土している。小破片で摩滅が著しく図化可能なものはなかった。出土した土器は弥生時代後期後半に位置づけられるが、1点のみ弥生時代中期以前の可能性がある甕形土器口縁部片が含まれている。

S004 溝出土遺物(図17) 壺、甕、高坏、鉢などが

出土しており、壺は体部・底部・広口壺、甕は口縁部・体部、高坏は有稜高坏や椀形高坏の坏部・脚部、鉢は平底鉢・脚台鉢が出土している。実測可能なものは04椀形高坏の1個体のみで、ほぼ完形である。出土した土器は、特徴から弥生時代後期後半に位置づけられる。

S005 凹地上層出土遺物(図14~16, 18~22) 上層と下層の2層に分かれ、併せて弥生土器の壺65点、甕150点、器台11点、高坏52点、鉢42点、手捏ね土器1点、器形不明土器1点、土製品1点、石器2点が出土している。壺は体部・底部・二重口縁壺・広口壺・直口壺・長頸壺、甕は口縁部・体部・底部、器台は小型、高坏は坏部・脚部・有稜高坏・椀形高坏、鉢は平底鉢・有孔鉢・脚台鉢、土製品は土玉、石器は軽石、スクレイパーが出土している。下層の土器に比べて小破片が多く、摩滅により器面調整が判明しないものが多い。

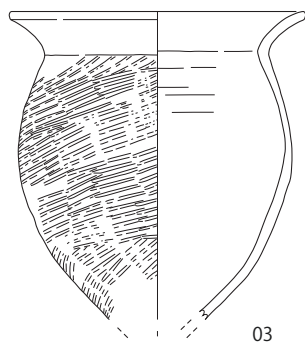
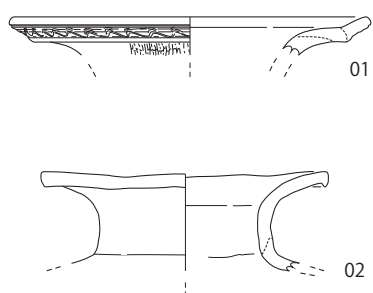
実測可能なものは、06・07・09広口壺、08二重口縁壺、48・49有孔鉢、52有稜高坏、58椀形高坏、71器台、73手捏ね土器、75軽石、76サヌカイト製スクレイパーがある。06は体部最大径が中位以下にあり、ほぼ完形である。07は広口直口壺で、体部下半から底部を欠く。09は口縁部から肩部の一部が残存している。08は口縁部と頸部に加飾を持つもので、体部以下を欠く。

48は平底でほぼ完形である。49は半球状の体部に尖底を有する個体で、体部外面はタタキの上からミガキ調整を施している。口縁部から底部の一部が残存している。

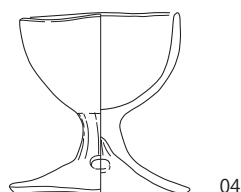
58は坏口縁部から底部の一部が残存し、脚部を欠く。71は小型器台または有孔鉢で、体部の一部が残存している。73は壺か甕を模倣した手捏ね土器でほぼ完形である。75は時期不明の軽石でほぼ完形である。76は完形のスクレイパーで、弥生時代中期以前である。

以上の特徴から、出土土器は弥生時代後期後半から米田編年(米田1991)の庄内式期Ⅱに位置し、76スクレイパーは流れ込んだ遺物と考えられる。

S001 落ち込み



S004 溝



S006 ため池

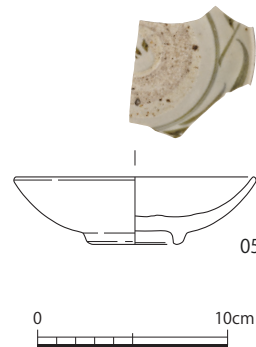


図17 S001落ち込み・S004溝・S006ため池出土土器 (1:4)

S005凹地下層出土遺物 (図14～16、18～22) 下層出土遺物のうち図化可能なものは、10～12・15～17広口壺・14二重口縁壺・13小型壺、18～36甕、38脚台鉢、37・39～44平底鉢・45小型鉢・46甕形鉢・47朱塗鉢・50有孔鉢、51～57有稜高坏・59～70椀形高坏、72器形不明土器、74土玉がある。

10広口壺は外面に被熱による赤変や煤の付着がある個体で、口縁端部が欠損している以外はほぼ完形である。11広口壺も底部外面に被熱による赤変が認められる。口縁部がほぼ完形で、体部から底部の一部が残存している。上層出土の06・07広口壺と異なり窪み底である。12はほぼ完形の小型壺で、体部外面は板ナデで仕上げられている。底部はケズリ仕上げの丸底である。13はほぼ完形と考えられるが、本来の口縁部は剥離している可能性もある。14は頸部から口縁部にかけての一部のみが残存している。15は口縁部から肩部の一部が残存している。16は口縁部の一部が残存しているもので、凹地での垂下口縁広口壺出土数は少ない。17は口縁部から体部の一部が残存し、底部を欠く。

18は口縁部の一部のみが残存している。19～21・23～33はほぼ完形である。22は他の甕に比べて体部の最大径が低い位置にあり底部も突出しない球形化した個体で、体部から底部につながる部分を欠く。19～22は他の遺物と比べ大型の個体である。また、19・20は他の甕

とくらべて若干古相に属する。28は丸底を志向しており、平底の底部と体部との境界が不明瞭である。31は器高が12.4cmの超小型甕である。34は口縁部と体部がほぼ完形で、底部を欠く。36は底部が完形で体部の一部が残存している甕で、底部外面付近のタタキをナデ消している。

33は生駒西麓産胎土で製作された小型の庄内形甕で、尖り底気味の平底である。外面は体部上半に左上がりのタタキが施され、胴部最大径より少し下の部分ではタタキが交差している。内面にはヘラケズリが施されており、内面にナデまたは板ナデの調整が施されている他の弥生形甕に比べて器壁が薄い。生駒西麓産の胎土を使用していると断言できる土器はこの個体のみである。

20・32の弥生形甕は体部下半に穿孔が認められる(図18)。20は先の尖った棒状のものを器壁外面に当て叩いたもので、打撃によって加えられた力が内面に放射状に抜け、外面には亀裂などは生じていないが、内面に剥離痕が認められる。32は打付けることができる尖った物によって叩いたもので、打撃により穿孔から大きな亀裂が2条のび、そのうち1条は底部にまで達している。これらの穿孔は、仮器化を目的としたものと考えられる。

38は高台状の底部を有し、口縁部から底部の一部が残存している。37は丸底を指向する小型品で、ほぼ完形である。39・40・42～44鉢はほぼ完形である。41は



図18 土器の打割り穿孔状況 (左:掲載番号32、右:掲載番号20 S005凹地 下層出土)

ミニチュアで、口縁部から体部の一部を欠く。44もミニチュアで、指の圧痕が明瞭に残り口縁部の作りも粗い。45・46は体部から底部がほぼ完形で、口縁部の一部が残存している。47は内外面朱塗りで、他の鉢と異なり横方向の細かなミガキが施されている。口縁部から体部の一部が残存している。50はほぼ完形である。

51は小型の高坏で、口縁部から体部の一部が残存している。52は北鳥池遺跡下層型有稜高坏(原田2003)で、裾部に透孔を4か所穿つ。坏口縁部から脚部の一部が残存しており、脚端部を欠く。53～57は坏部に縦方向のミガキが施された有稜高坏で、53・56・57は坏口縁部から体部の一部が残存している。53は他の個体に比べて明らかに坏部の形状が古く、で弥生時代後期後半に位置する。54は坏口縁部から脚部の一部が残存し、脚端部は欠損している。55は坏部が完形で、脚部を欠く。57は坏部が二段屈曲する個体で、出土した高坏の中では新相に位置する。

59～66は椀形高坏である。59はほぼ完形の大きく開く脚部を持つ個体で、坏部外面に横方向のミガキを施す。57と同じく庄内式期Ⅱに位置すると考えられる。凹地の底面に脚裾部を着底した状況で出土した。61は他の椀形高坏と異なり脚裾部が広がらないもので、坏部内面が全面焼け焦げている。凹地内で倒れた状態であったが、坏部に40平底鉢を載せられたままの状況で出土した。60は53と同じく古相に属する個体で、鉢に似た坏部は完形であるが脚部が欠損している。62は他の個体に比べて赤みの強い胎土が使用されており、脚柱部に細い横方向のミガキを施し3か所に透孔を穿つ。坏部はほぼ完形であるが、脚部は基部から脚柱上部しか残存していない。63・66は坏部から脚柱部はほぼ完形で、脚端部のみ欠損している。64は坏口縁部から脚柱部の一部が残存している。65は坏部がほぼ完形で、脚部は基部が残存するのみで、脚柱部から端部は欠損している。

67～70は高坏脚部で、67・68は基部から端部の一部が残存している。69・70は基部から脚柱部の一部が残存し端部は欠損している。72は体部から底部は完形であるが、口縁部を欠くため全容を復元し難く器形は不明である。74は完形品の土玉で指による成形痕が残る。

以上の特徴から、出土土器は、弥生時代後期後半から庄内式期Ⅱに位置すると考えられる。

S006ため池出土遺物(図17) 江戸時代後期の瀬戸産と考えられる05磁器染付皿が1点出土している。

S007井戸出土遺物 弥生土器の壺体部、甕体部・甕底部、高坏脚部の計5点が出土している。小破片で摩滅が著しく図化可能なものはなかった。出土した土器はタ

タキ甕を含むことから弥生時代後期と考えられる。

S008溝出土遺物(図10・23) 上層と下層の2層に分かれ、上層、下層併せて弥生土器の壺19点、甕32点、高坏11点、鉢13点、壺は体部、底部、広口壺、直口壺、長頸壺、甕は口縁部、体部、底部、高坏は坏部、脚部、鉢は平底鉢、脚台鉢が出土している。

上層から出土した遺物で図化可能なものは77・78広口壺、83・84・85甕、87・90平底鉢、88・89・91・92脚台鉢、94高坏脚部がある。77・78は口縁部と頸部が残存しており、体部から底部を欠く。77の口縁部は大きく外反する。

83は器高29cmの超大型品で長い体部をもち、今回出土した甕の中で最も古相に位置する個体で、ほぼ完形である。84は平底であるが83ほど突出しておらず、底部はほぼ完形で体部下半の一部も残存している。85は口縁部がほぼ完形で、体部の一部が残存している。87・88・89はほぼ完形であり、87は大型の平底鉢である。90・91・92は底部が完形で、体部の一部が残存している。94は坏部を欠く個体で、脚柱部から裾へと移る境目は不明瞭で裾部のほぼ上端に透孔を3か所穿つ。

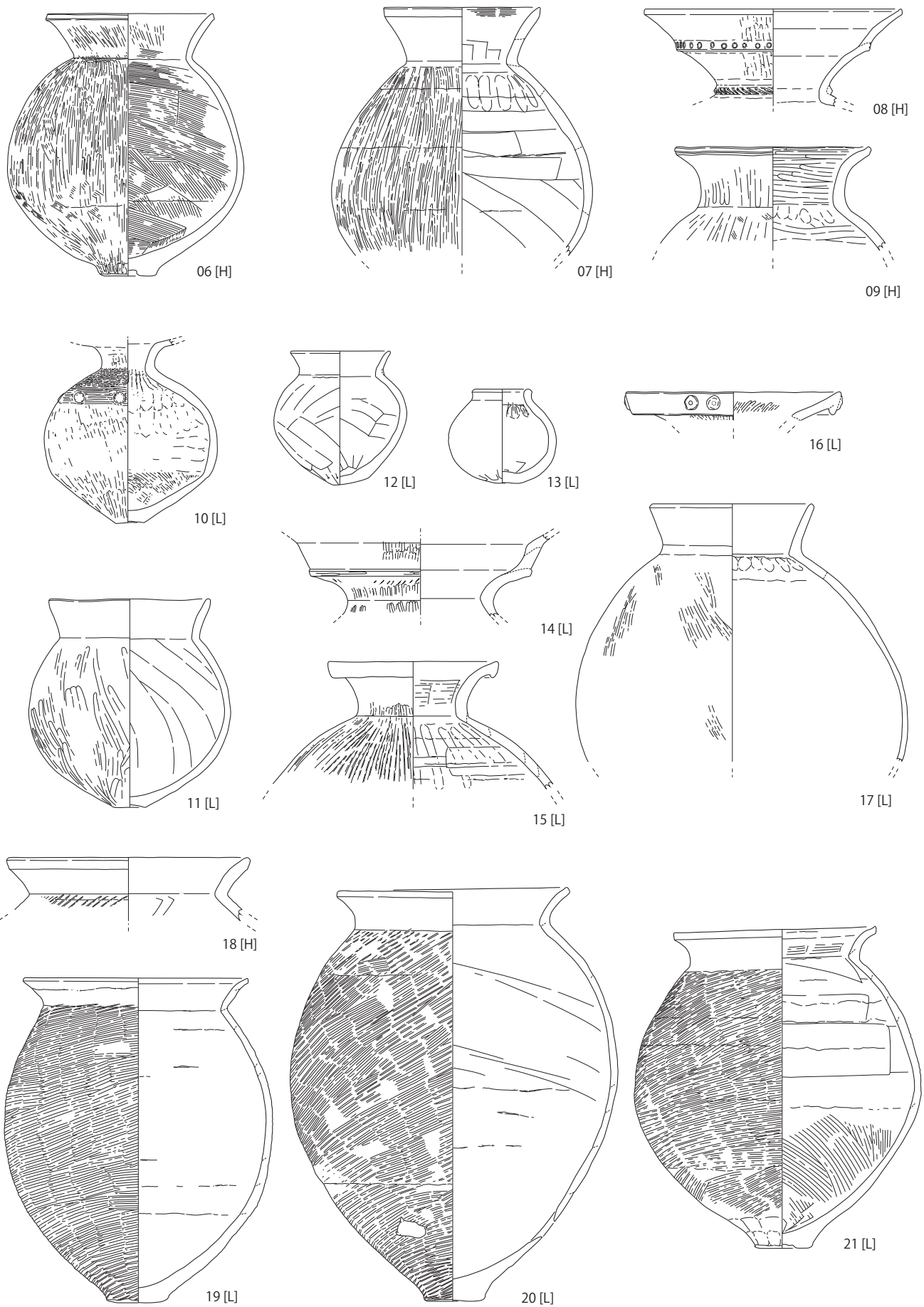
下層出土遺物のうち実測に耐えうるものは、79・81広口壺、80直口壺、82長頸壺、86甕、93脚台鉢である。79は口縁部と頸部の一部が残存している。81はほぼ完形の小型品で、口縁部の一部を欠く。82は口縁部がほぼ完形で、体部から底部を欠く。86は口縁部から体部上部が残存しており、体部下部から底部を欠く。93はほぼ完形で、90・92と同じく上げ底である。

土器の特徴から、上層が弥生時代後期後半から庄内式期Ⅱ、下層が弥生時代後期後半に位置する。

S010凹地出土遺物 弥生土器の甕体部、高坏脚部、有稜高坏坏部、台付鉢が出土している。小破片で摩滅が著しく図化し得なかった。弥生時代後期と考えられる。

S012流路出土遺物(図24) 弥生土器の壺、甕、高坏、鉢などが出土しており、壺は体部、甕は口縁部、体部、底部、高坏は有稜高坏坏部、鉢は有孔鉢の尖底が出土している。実測に耐えうるものは95甕、96有孔鉢の尖底がある。95は口縁部から体部がほぼ完形で残存しているが、底部を全て欠く。96は口縁部全てが欠損しているが、体部下半から底部はほぼ完形である。弥生時代後期後半から庄内式期Ⅱに位置すると考えられる。

S020土坑出土遺物 弥生土器の壺体部、甕口縁部、体部・底部、高坏脚部・椀形高坏坏部が計8点出土している。小破片や摩滅が著しく図化可能なものはなかった。弥生時代後期と考えられる。



※遺構出土遺物のうち上層出土品は [H]、下層出土品は [L] と表記

図19 S005凹地出土土器 (1) (1:4)

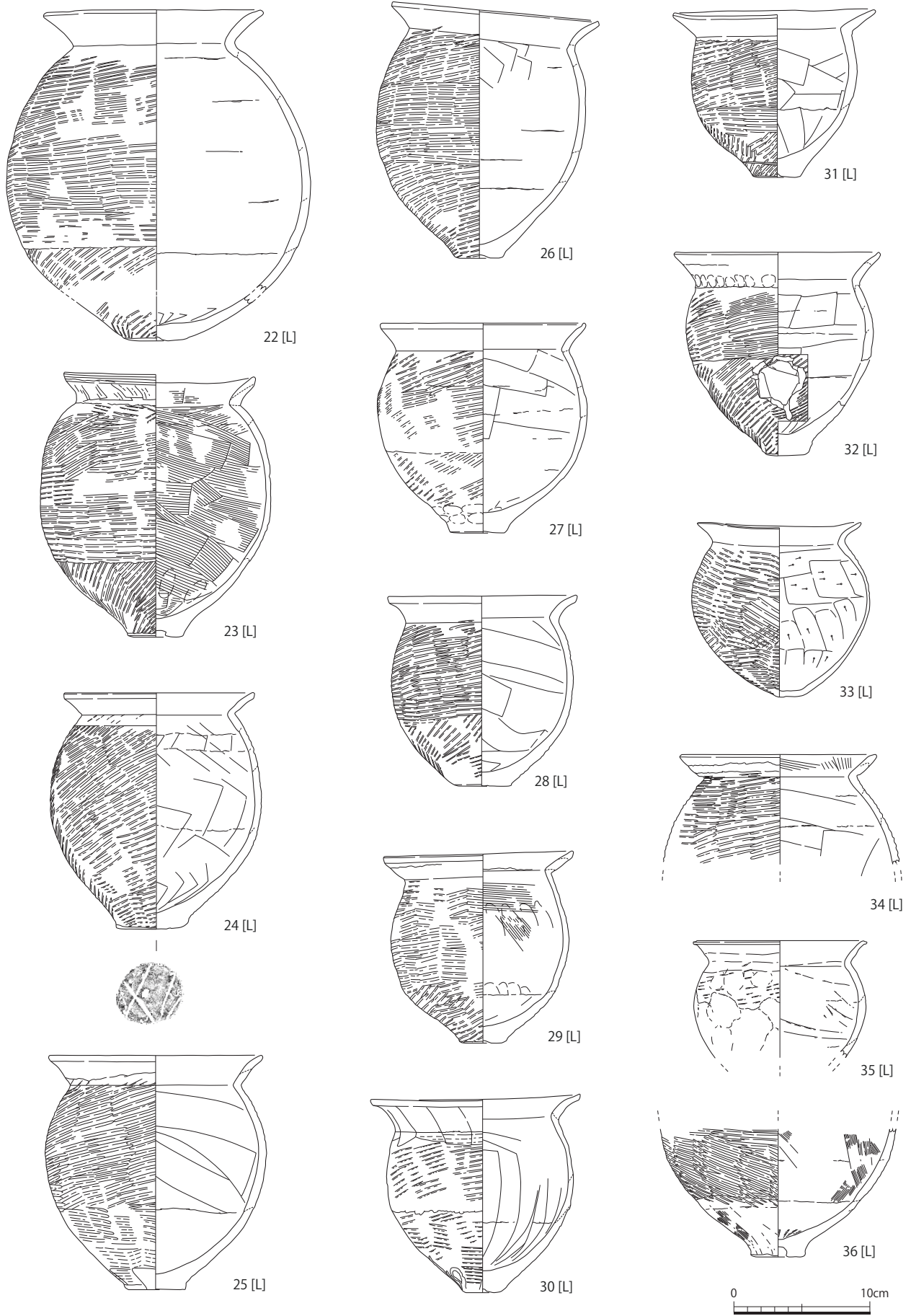


图20 S005凹地出土土器 (2) (1:4)

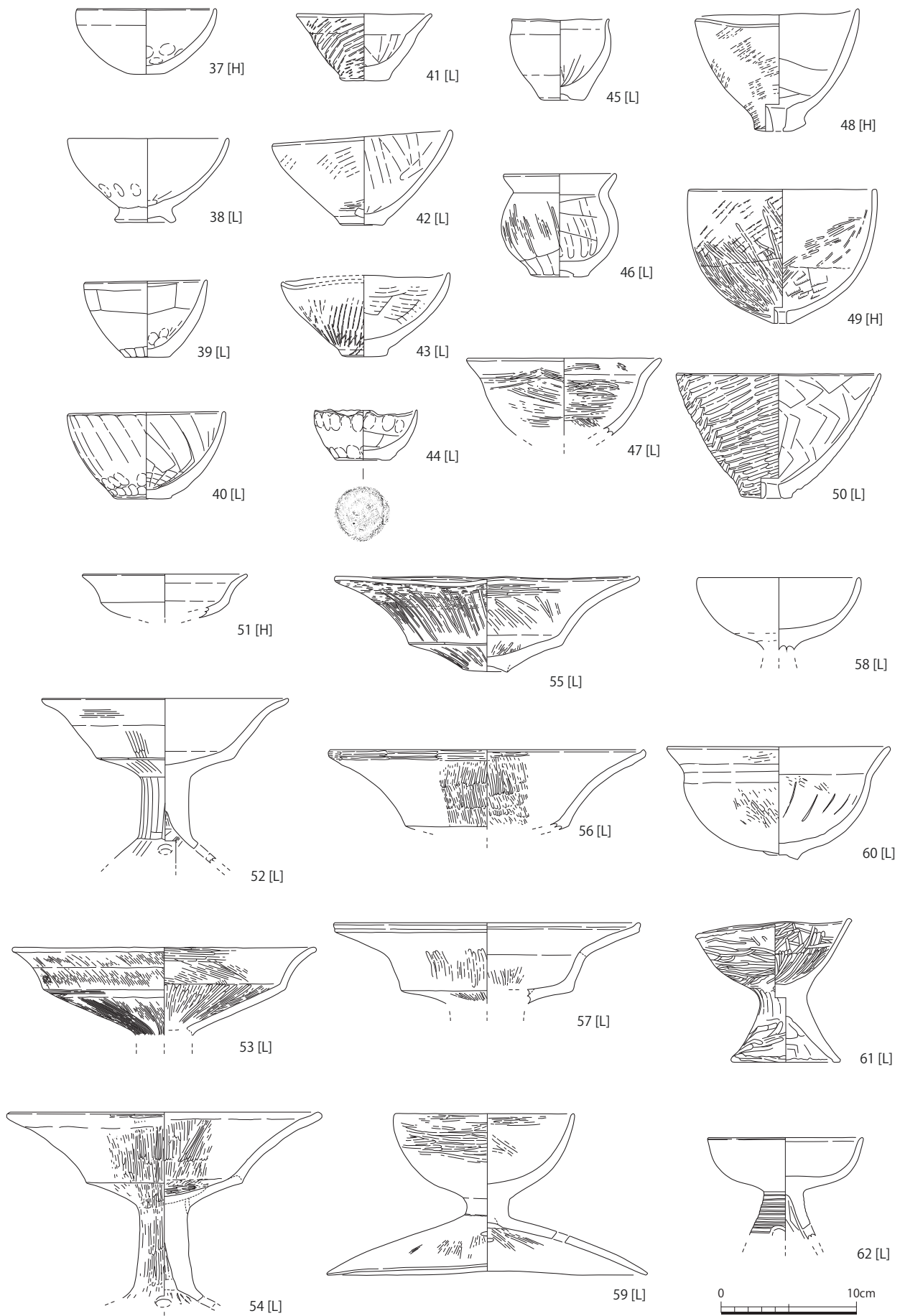


图21 S005地凹出土土器 (3) (1:4)

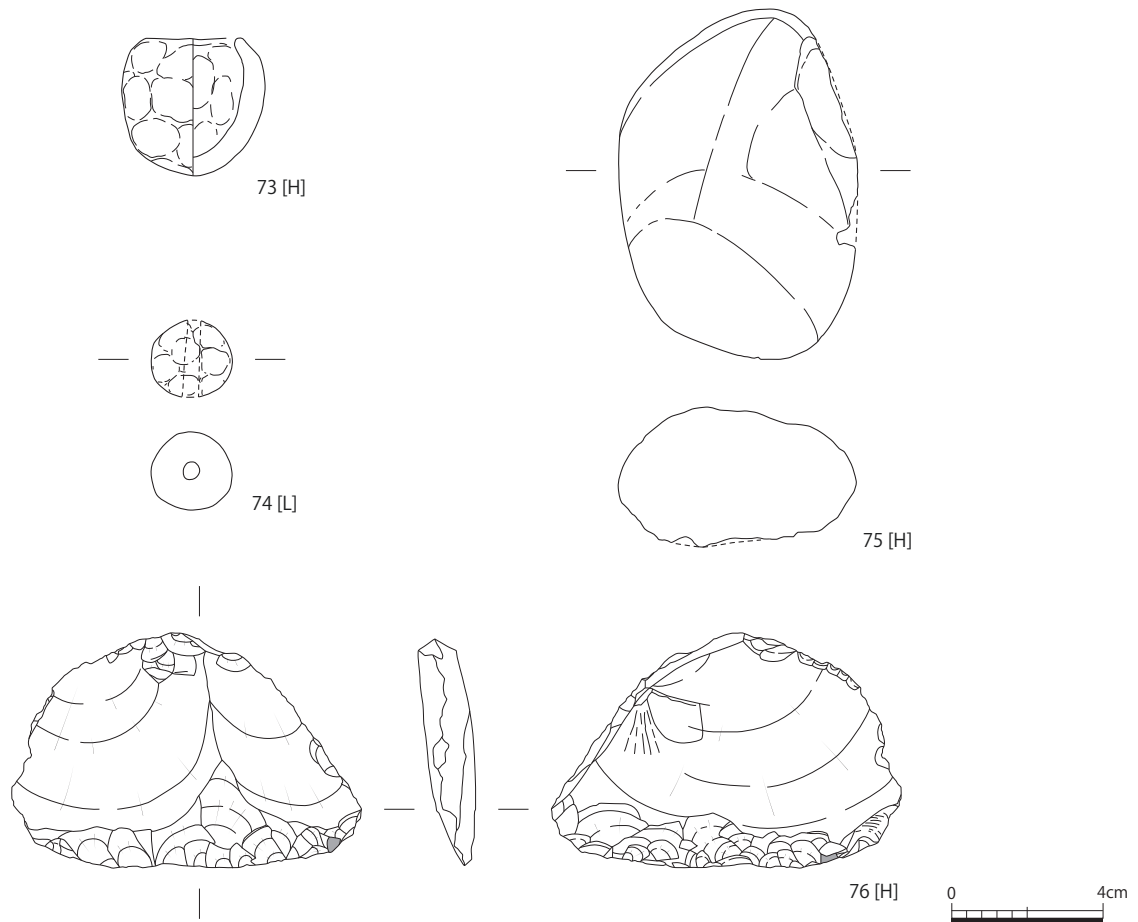
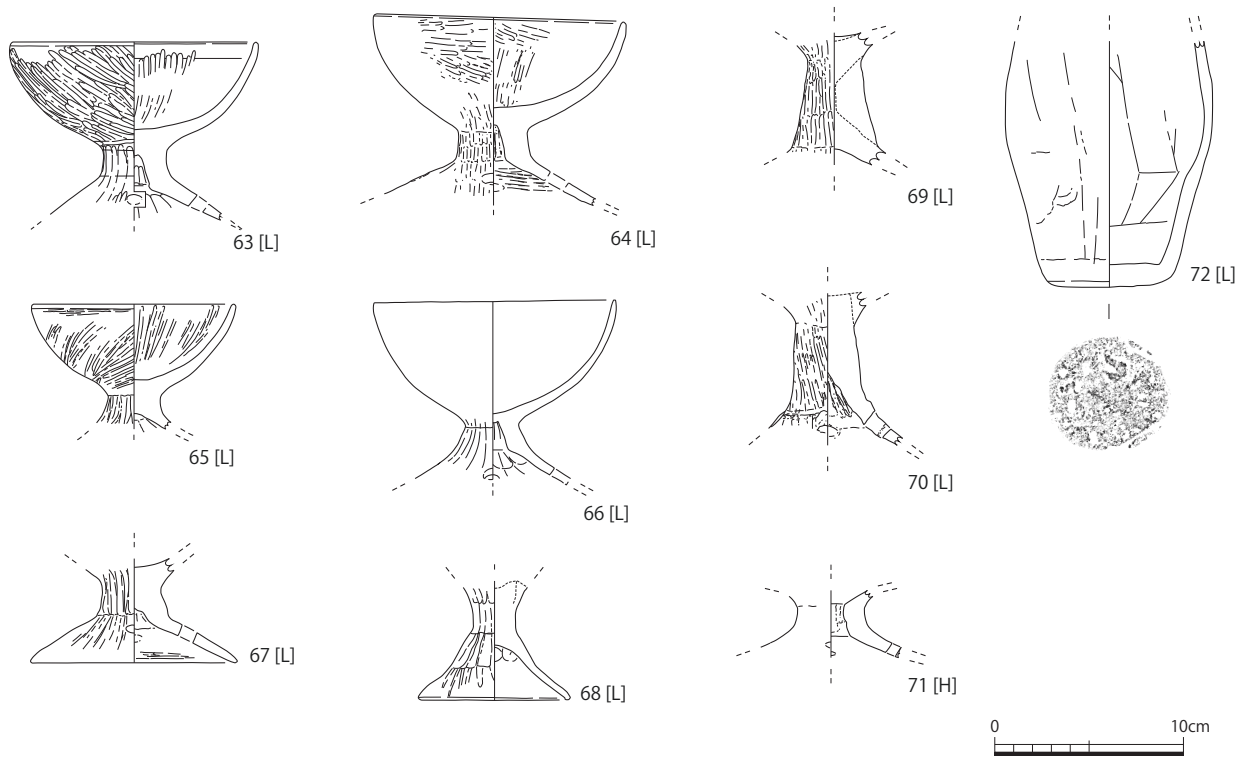


図22 S005凹地出土土器(4)・土製品・石器(63~72 1:4・73~76 1:2)

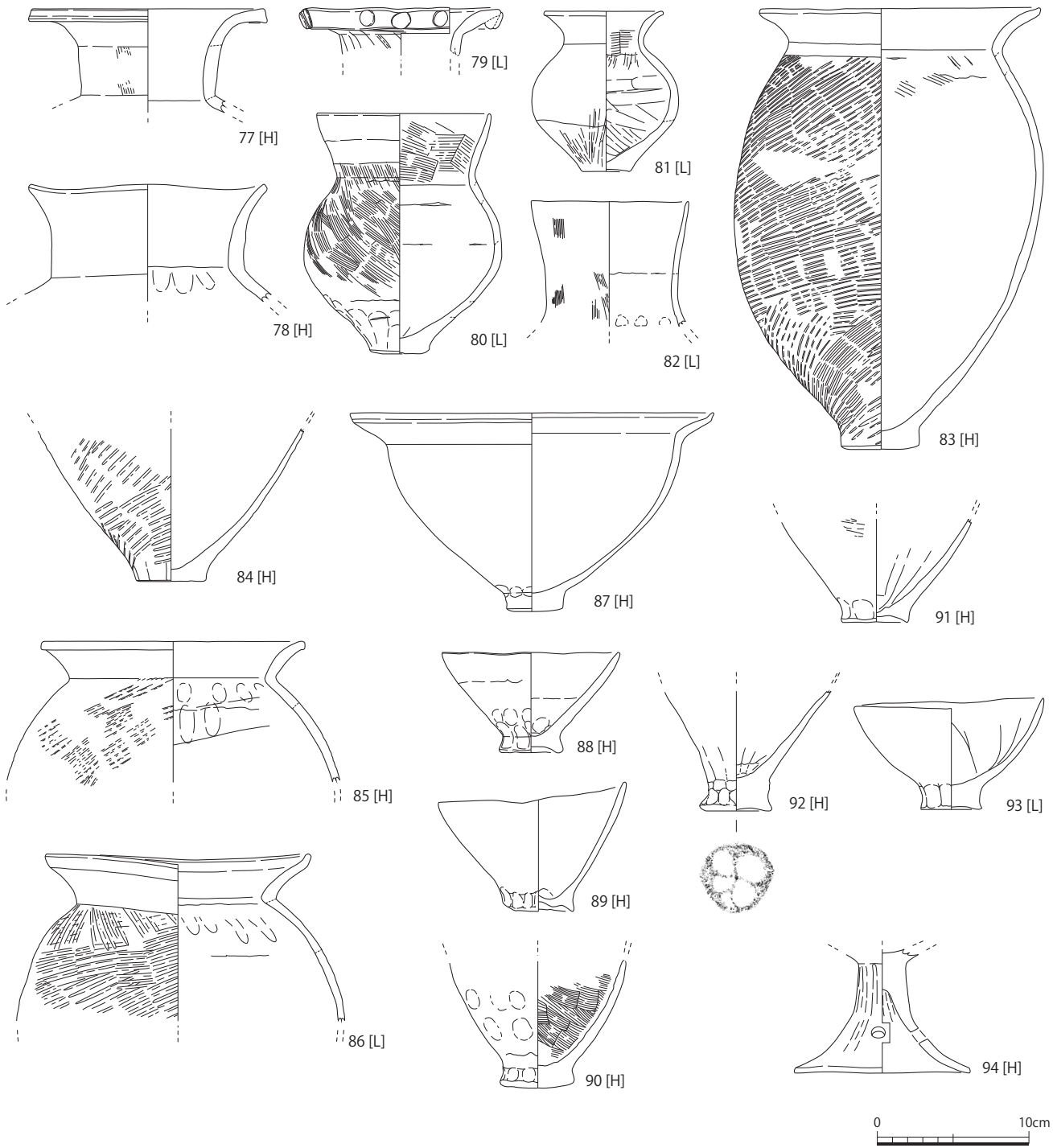


图23 S008沟出土土器 (1:4)

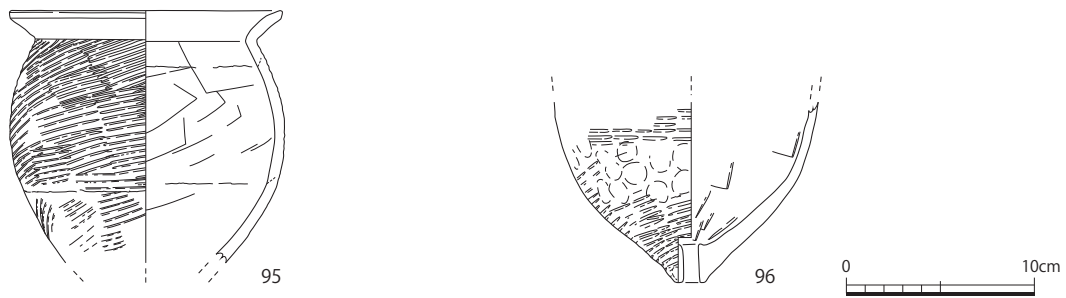


图24 S012流路出土土器 (1:4)

表1 遺物観察表(1)

遺物実 測番号	掲載 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) () は推定 () は残存	調整など	外面色調	遺構番号	備考
009-01	1	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 [18.6] 器高 (2.00)	外面：口縁部ヨコナデ、擬凹線のち波状文、頸部ヘラミガキ 内面：風化のため調整不明	10R6/8 赤橙 5Y8/1 灰白	S001	赤彩
198-01	2	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 14.75 器高 (5.30)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、以下風化のため調整不明	7.5YR8/3 浅黄橙	S001	口縁部外側面、口縁部内面スス付着
170-01	3	弥生土器	甕	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 [15.40] 器高 (16.20) 最大径 14.40	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S001	外面全面スス付着、口縁部、体部下半被熱による赤変、内面体部下半薄いコゲ
294-01	4	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 8.10 器高 9.50 底径 8.80	円形スカシ2孔 外面：風化のため脚部にヘラミガキが部分的に残存 内面：坏部風化のため調整不明、脚部絞り目、ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	S004	
036-01	5	磁器	皿 (染付)	近世	口径 [12.40] 器高 3.55 高台径 [5.00] 高台高 0.60	外面：無文、削り出し高台 内面：圏線2条、草花文様	10GY8/1 明緑灰	S006 機能時 堆積層	瀬戸産
117-01	6	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 12.20 器高 19.00 底径 4.20 最大径 17.55	外面：ハケのちヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ハケ	7.5YR8/3 浅黄橙	S005 上層	外面全面スス付着、口縁部、底部被熱による赤変、内面口縁部スス、体部下半薄いコゲ付着
253-01	7	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 [11.5] 器高 (18.45) 最大径 [19.40]	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部板ナデ、ナデ、体部ハケ	10YR8/2 灰白	S005 上層	
057-01	8	弥生土器	二重口縁壺	弥生時代後期後半	口径 [19.0] 器高 (7.20) 頸径 [8.80]	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、円形刺突文、頸部突帯に刻文 内面：ヨコナデ	5YR7/8 橙	S005 上層	
126-01	9	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 [14.20] 器高 (7.70)	外面：口縁部沈線1条、ハケのちヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ユビオサエ、ナデ、板ナデ	2.5Y7/2 灰黄	S005 上層	
169-07	10	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	器高 (13.70) 底径 1.90 最大径 12.90	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、体部ヘラミガキ、肩部にクシ描き波状文、直線文、円形浮文 内面：絞り目、ユビオサエ、ナデ、ハケ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	外面被熱による赤変、スス付着、体部下半に被熱による剥離、肩部内面に薄いコゲ
205-01	11	土師器	広口壺	古墳時代初頭(庄内I)	口径 11.70 器高 15.50 底径 [2.30] 最大径 [15.00]	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部凹面 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	5Y7/1 灰白	S005 下層	底部に被熱による赤変
252-01	12	土師器	広口壺 (小形)	古墳時代初頭(庄内I)	口径 7.25 器高 9.95 底径 2.65 最大径 9.90	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底面に板状敷物圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	
231-01	13	弥生土器	壺 (小形)	弥生時代後期後半	口径 [3.80] 器高 7.00 底径 1.60 最大径 8.00	口縁部は頸部接合面で剥離亡失 外面：ナデ 内面：絞り目、ユビオサエ、ナデ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	
172-13	14	弥生土器	二重口縁壺	弥生時代後期後半	器高 (6.10) 頸径 [10.80]	外面：ヨコナデ、ハケのちヘラミガキ 内面：ナデ	10YR8/1 灰白	S005 下層	
202-01	15	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 [12.40] 器高 (9.50)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部絞り目、板ナデ	10YR8/2灰白	S005 下層	
172-10	16	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 [15.80] 器高 (2.10)	外面：口縁部ヨコナデのち円形浮文、頸部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙	S005 下層	生駒西麓産
169-03	17	弥生土器	直口壺	弥生時代後期後半	口径 11.75 器高 (19.15) 最大径 [24.60]	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ	7.5YR8/6 浅黄橙	S005 下層	口縁部内面薄いスス付着、体部外面薄い被熱による赤変
172-09	18	弥生土器	甕	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 [17.65] 器高 (4.70)	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	
215-01	19	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 16.50 器高 24.15 底径 4.50 最大径 19.90	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	S005 下層	外面全面スス付着、底部薄い赤変、体部被熱による剥離著しい。内面全面薄いコゲ、下半に米粒状のコゲ
239-01	20	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 16.9 器高 30.75 底径 4.50 最大径 24.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR8/4 浅黄橙	S005 下層	底部に間接打撃による穿孔外面(図18)、全面スス付着、底部薄い赤変、内面下半コゲ

表2 遺物観察表(2)

遺物実 測番号	掲載 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) () は推定 () は残存	調整など	外面色調	遺構番号	備考
226-01	21	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 14.90 器高 23.90 底径 4.20 最大径 21.20	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ハケ、ヨコナデ、 体部上半板ナデ、下半ハケ	10YR8/2 灰白	S005 下層	外面全面スス付着、底部被熱による赤変、剥離、内面口縁部端スス付着
201-01	22	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 14.30 器高 (19.20+3.10) 底径 4.40 最大径 20.40	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ底部輪台 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	S005 下層	外面全面にスス付着、底部下半被熱による赤変、体部内面中位、上位に帯状のコゲ
258-01	23	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 13.90 器高 19.40 底径 4.00 最大径 16.85	外面：口縁部ハケ後ヨコナデ、端面ハケ、 体部タタキ 内面：口縁部板ナデ、ナデ、体部ヨコハケ、 ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面全面スス付着、内面下半薄いコゲ付着、米粒状のコゲ
238-01	24	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [13.80] 器高 17.35 底径 5.30 最大径 16.10	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、 底部底面木葉状の敷物圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	7.5YR8/2 明褐灰	S005 下層	外面全面スス付着、肩部に被熱による赤変、内面下半に薄いコゲ
255-01	25	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [15.50] 器高 17.20 底径 4.15 最大径 [16.25]	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	S005 下層	外面全面、口縁部内面スス付着、体部内面下半薄いコゲ
172-12	26	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 15.00 器高 18.80 底径 3.60 最大径 15.40	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部輪台 内面：板ナデ、ナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	外面全面スス付着、体部下半被熱による赤変、内面全面スス付着、体部下半コゲ
234-01	27	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [14.80] 器高 15.40 底径 3.95 最大径 15.40	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、 ユビオサエ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ、 ユビオサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	S005 下層	外面全面、口縁部内面スス付着、体部内面薄いコゲ
228-01	28	弥生土器	甕	古墳時代初頭 (庄内式期I)	口径 13.70 器高 14.00 底径 4.20	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面全面スス付着、内面全面炭素吸着、底部底に薄いコゲ
172-02	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [13.80] 器高 14.10 底径 3.45	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、ユビナデ	10YR6/8 赤橙	S005 下層	外・内面薄くスス付着、全体に被熱による赤変、体部内面薄いコゲ
172-04	30	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 15.25 器高 14.55 底径 2.60	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケのちナデ	7.5YR8/1 灰白	S005 下層	外面薄いスス付着
241-01	31	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 14.65 器高 12.4 底径 3.50	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面吹きこぼれ状のスス、内面下半薄いコゲ
236-01	32	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [14.90] 器高 14.95 底径 3.05	外面：口縁部ヨコナデ、ユビオサエ 体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	S005 下層	体部に直接打撃による穿孔(図18)、外面全面スス付着、底部被熱による赤変
251-01	33	土師器	甕	古墳時代初頭 (庄内式期I)	口径 11.85 器高 12.80 底径 1.80 最大径 13.10	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	10YR6/3 にぶい黄橙	S005 下層	生駒西麓産、外面全面、口縁内面スス付着、体部内面コゲ
210-01	34	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 14.40 器高 (8.10)	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ハケ、体部板ナデ	7.5YR8/2 灰白	S005 下層	外面全面、口縁部内面スス付着
218-01	35	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 12.20 器高 (8.60) 最大径 12.60	外面：口縁部棒状工具による押し、 口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	10YR6/2 灰黄褐 10R5/6 赤	S005 下層	外面口縁部～体部上半、口縁部内面スス付着、体部下半被熱により赤変し全面剥離、体部下半コゲ
209-01	36	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	器高 (9.40) 底径 4.00	外面：タタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ、 底部輪台 内面：ハケ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	外面スス付着、被熱による赤変、内面薄いコゲ
086-01	37	土師器	平底鉢 (小)	古墳時代初頭 (庄内式期I)	口径 10.15 器高 4.85 底径 2.80	外面：風化のため調整不明 内面：ユビオサエ	7.5YR8/2 灰白	S005 下層	外面被熱による赤変
248-01	38	弥生土器	脚台鉢 (精製)	弥生時代後期後半	口径 11.65 器高 6.20 底径 3.85	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ユビオサエ、ナデ	5YR7/6 橙 5YR8/3 淡橙	S005 下層	外面三日月状のスス、内面半月状のスス
233-01	39	弥生土器	平底鉢 (小)	弥生時代後期後半	口径 8.90 器高 5.70 底径 3.30	外面：ナデ・板ナデ 内面：ユビオサエ・ナデ・板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外・内面スス付着、口縁外面被熱による赤変
240-01	40	弥生土器	平底鉢 (中)	弥生時代後期後半	口径 11.40 器高 6.40 底径 4.25	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ハケ・ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面中位・内面口縁部端スス付着

表3 遺物観察表(3)

遺物実測番号	掲載番号	種別	器形	時期	法量 (cm) 〔 〕は推定 ()は残存	調整など	外面色調	遺構番号	備考
172-07	41	弥生土器	平底鉢(小)	弥生時代後期後半	口径 9.80 器高 4.95 底径 3.65	外面：タタキ、ナデ 内面：板ナデ、ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄	S005 下層	外面被熱による赤変、スス付着
242-01	42	弥生土器	平底鉢(中)	弥生時代後期後半	口径 13.05 器高 7.00 底径 3.40	外面：タタキのちナデ・ヨコナデ 内面：ユビオサエ・板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面薄い被熱による赤変
216-01	43	弥生土器	平底鉢(中)	弥生時代後期後半	口径 12.2 器高 6.20 底径 3.30	外面：タタキのちヨコナデ 内面：ハケのちヨコナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	
232-01	44	弥生土器	平底鉢(小)	弥生時代後期後半	口径 7.50 器高 3.70 底径 3.90	外面：ユビオサエ、ナデ 底面にハケ押し引き 内面：ユビオサエ、ナデ	2.5YR7/8 橙	S005 下層	外面赤変、内面スス付着
172-01	45	弥生土器	小形鉢	弥生時代後期後半	口径 7.00 器高 6.00 底径 3.15	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：板ナデ、ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	被熱による赤変
204-01	46	弥生土器	甕形鉢	弥生時代後期後半	口径 8.10 器高 7.60 底径 4.25 最大径 8.60	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケのちナデ、 底部輪台 内面：ナデ	10YR8/3 浅黄橙	S005 下層	体部外面、口縁部内面スス付着
202-02	47	弥生土器	鉢	弥生時代後期後半	口径 14.10 器高 5.70	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	10YR8/2 灰白 10R6/6 赤橙	S005 下層	全面に赤色顔料塗布
142-01	48	弥生土器	有孔鉢(平底)	弥生時代後期後半	口径 11.90 器高 8.05 底径 3.80	外面：タタキ 内面：板ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	S005 上層	
149-01	49	弥生土器	有孔鉢(尖底)	弥生時代後期後半	口径 13.60 器高 9.90 底径 1.35	外面：タタキのちヘラミガキ、ナデ 内面：ハケのちヘラミガキ	7.5YR8/1 灰白	S005 上層	外面薄くスス付着、被熱による赤変、内面薄くスス付着
235-01	50	弥生土器	有孔鉢(平底)	弥生時代後期後半	口径 14.95 器高 9.20 底径 3.70	外面：タタキ 内面：板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面に吹きこぼれ状のスス、縞状の被熱による赤変、内面三日月形のスス付着
131-01	51	弥生土器	有稜高坏	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 12.00 器高 3.25	風化のため調整不明	10R6/8 赤橙	S005 下層	
157-01	52	弥生土器	有稜高坏	弥生時代後期末	口径 18.00 器高 12.15	円形スカシ4孔 外面：ヨコハケのちヘラミガキ 内面：坏部風化のため調整不明、脚部絞り目、ハケのちナデ	2.5Y7/2 灰黄	S005 下層	口縁部外・内面薄くスス付着
061-01	53	弥生土器	有稜高坏	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 22.00 器高 6.50	外面：坏上面ヘラミガキ、坏底面ハケ 内面：ハケのちヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	外・内面スス付着
169-10	54	土師器	有稜高坏	古墳時代初頭(庄内式期I)	口径 22.60 器高 14.00	円形スカシ4孔 外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部絞り目、ヨコナデ、板ナデ	7.5YR8/1 灰白	S005 下層	坏部外・内面スス付着
246-01	55	弥生土器	有稜高坏	弥生時代後期後半	口径 22.20 器高 7.05	外面：ハケのちヘラミガキ、脚部除却、 刀子状工具による切除痕 内面：ヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	外面被熱による赤変、スス付着、内面コゲ付着、坏部が40°余り傾斜した状態で火にかけられた模様
169-11	56	弥生土器	有稜高坏	弥生時代後期後半	口径 23.00 器高 5.90	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	7.5YR5/1 褐灰 7.5YR8/1 灰白	S005 下層	
169-04	57	土師器	有稜高坏	古墳時代初頭(庄内式期II)	口径 22.40 器高 5.95	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	7.5YR8/1 灰白	S005 下層	外・内面前面に薄くスス付着
211-01	59	土師器	椀形高坏	古墳時代初頭(庄内式期II)	口径 13.10 器高 11.90 底径 23.40	円形スカシ4孔 外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ユビオサエ、ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	外面薄いスス付着、脚端部被熱による赤変、被熱による微細剥離、坏部内面薄いコゲ、脚部内面薄いスス付着
023-01	58	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 11.80 器高 5.30	風化のため調整不明	7.5YR8/6 浅黄橙 2.5YR6/8 橙	S005 上層	
203-01	60	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 16.30 器高 8.30	脚部を切断除却 外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、暗文	10YR8/2 灰白	S005 下層	外面に薄くスス付着、口縁部被熱による赤変、頸部内面に薄いコゲ
240-02	61	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 11.15 器高 10.60 底径 7.85	外面：坏部～脚部ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ユビオサエ、板ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	坏部全面炭素吸着

表4 遺物観察表(4)

遺物実 測番号	掲載 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) 〔 〕は推定 ()は残存	調整など	外面色調	遺構番号	備考
208-01	62	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 11.30 器高 (7.50)	円形スカシ3孔 外面：ナデ、脚部ナデのち沈線 内面：坏部ナデ、脚部ナデ	7.5YR8/2 灰白 5YR5/8 明赤褐	S005 下層	
169-12	63	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 12.80 器高 (9.40)	円形スカシ4孔 外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部絞り目、ナデ	7.5YR8/1 灰白	S005 下層	口縁部外・内面薄くスス付着
145-01	64	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 (15.10) 器高 (9.10)	円形スカシ4孔 外面：坏部～脚部ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部絞り目、ハケ、ナデ	2.5Y8/2 灰白	S005 下層	口縁部外・内面薄くスス付着
169-01	65	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 (10.60) 器高 (6.60)	外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ユビオサエ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙 10R6/8 赤橙	S005 下層	口縁部外面薄くスス付着、外面全面赤変
169-08	66	弥生土器	椀形高坏	弥生時代後期後半	口径 12.65 器高 (9.70)	円形スカシ4孔 外面：坏部風化のため調整不明、脚部ヘラミガキ 内面：坏部底部ユビオサエ、脚部絞り目、ユビオサエ、ナデ	5YR7/6 橙	S005 下層	
206-01	67	弥生土器	高坏	弥生時代後期後半	器高 (5.55) 底径 (10.70)	円形スカシ4孔 外面：ヘラミガキ 内面：脚部絞り目、板ナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	
172-06	68	弥生土器	高坏	弥生時代後期後半	器高 (6.30) 脚部径 (7.80)	外面：ヘラミガキ 内面：ユビオサエ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 下層	
172-17	69	弥生土器	高坏	弥生時代後期後半	器高 (7.00)	外面：ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	中実脚
172-16	70	弥生土器	高坏	弥生時代後期後半	器高 (8.10)	円形スカシ4孔 外面：ヘラミガキ、脚裾に段 内面：絞り目、ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙 10YR8/2 灰白	S005 下層	
172-14	71	弥生土器	器台 (小形)	弥生時代後期後半	器高 (3.50)	外面：風化のため調整不明 内面：絞り目、ナデ	10R6/8 赤橙	S005 上層	
169-13	72	弥生土器	器形不明	弥生時代後期後半	器高 (13.00) 底径 6.30 最大径 (10.95)	外面：ナデ 内面：ナデ	10YR8/2 灰白	S005 下層	
024-01	73	弥生土器	手捏ね土器	弥生時代後期後半	口径 2.45 器高 3.65 最大径 3.80	外面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	S005 上層	
169-02	74	土製品	土玉	弥生時代後期後半	縦 2.00 横 2.15 厚 2.10	中心に径4mmの穿孔 外面：全面ユビオサエ	10YR5/1 褐灰	S005 下層	
175-03	75	石製品	軽石		縦 9.25 横 6.30 厚 3.95	使用痕あり?	10YR7/1 灰白	S005 上層	
172-05	76	石器	スクレイパー		縦 6.20 横 9.25 厚 1.20	古銅輝石安山岩(sanukite)の剥片を利用したスクレイパー、刃部は押圧剥離により調整	N4/0 灰	S005 上層	弥生時代中期以前
264-01	77	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 15.10 器高 (6.85)	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケのちヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、以下風化のため調整不明	7.5YR8/1 灰白	S008 上層	口縁部外、内面スス付着
176-02	78	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 15.30 器高 (7.70)	外面：風化のため調整不明 内面：肩部ナデ	10YR8/2 灰白	S008 上層	
176-01	79	弥生土器	広口壺	弥生時代後期前半(河内V-3)	口径 (12.80) 器高 (3.10)	外面：ハケのちヨコナデ、口縁部3個単位の円形浮文 内面：ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	S008 下層	生駒西麓産
290-01	80	弥生土器	直口壺	弥生時代後期前半(河内V-3)	口径 11.30 器高 15.85 底径 4.00 最大径 13.00	外面：口縁部ヨコナデ体部ハケ、底部ナデ、ユビオサエ 内面：口縁部ハケ、体部ナデ、ユビオサエ	10YR8/2 灰白	S008 下層	外面全面、内面口縁部端部にスス付着、底部被熱による赤変
293-01	81	弥生土器	広口壺 (小形)	弥生時代後期前半(河内V-3)	口径 7.65 器高 10.55 底径 3.00 最大径 9.65	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底面ヘラズリ 内面：口縁部ハケのちヨコナデ、体部絞り目、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S008 下層	
286-01	82	弥生土器	長頸壺	弥生時代後期前半(河内V-3)	口径 10.25 器高 (8.25)	調整は風化のため部分的に残存 外面：ハケ 内面：ユビオサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	S008 下層	
260-01	83	弥生土器	甕	弥生時代後期後半(河内VI)	口径 18.30 器高 29.10 底径 5.10 最大径 20.20	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケ、肩部以下ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	S008 上層	外面全面、口縁部内面スス付着

表5 遺物観察表(5)

遺物実測番号	掲載番号	種別	器形	時期	法量 (cm) 〔 〕は推定 ()は残存	調整など	外面色調	遺構番号	備考
269-01	84	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	器高 (10.05) 底径 4.60	外面：タタキ、ナデ 内面：風化のため調整不明	5YR8/2 灰白	S008 上層	
263-02	85	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 16.95 器高 (9.25)	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ、ナデ	7.5YR8/1 灰白	S008 上層	外面スス付着
287-01	86	弥生土器	甕	弥生時代後期前半(河内V-3)	口径 17.20 器高 (11.00) 最大径 (21.60)	口縁端部が受け口状に立ち上がる 外面：タタキ 内面：ナデ	7.5YR8/1 灰白	S008 下層	
266-01	87	弥生土器	平底鉢(大)	弥生時代後期後半	口径 23.80 器高 13.10 底径 3.70	風化により調整不明	5YR7/8 橙	S008 上層	
200-01	88	弥生土器	脚台鉢(粗製)	弥生時代後期後半	口径 (11.60) 器高 6.60 底径 3.85	外面：コビオサエ、ナデ 内面：コビオサエ、ナデ	5YR6/6 橙	S008 上層	外・内面スス付着、被熱による赤変
295-01	89	弥生土器	脚台鉢(粗製)	弥生時代後期後半	口径 12.25 器高 8.50 底径 4.50	外面：コビオサエ、ナデ 内面：コビオサエ、ナデ	2.5Y8/1 灰白	S008 上層	
262-01	90	弥生土器	平底鉢(粗製)	弥生時代後期後半	器高 (8.40) 底径 4.90	外面：乱雑なコビオサエとナデ 内面：ハケ	2.5Y8/2 灰白	S008 上層	外面全面スス付着、内面薄いコゲ
304-03	91	弥生土器	脚台鉢(粗製)	弥生時代後期後半	器高 (7.40) 底径 4.20	外面：タタキ、ナデ、コビオサエ 内面：板ナデ	2.5Y8/2 灰白	S008 上層	外面薄くスス付着・脚台被熱による赤変、内面薄くスス付着
265-01	92	弥生土器	脚台鉢(粗製)	弥生時代後期後半	器高 (7.80) 底径 4.80	外面：体部ナデ、脚台側面、底面コビオサエ 内面：ナデ、コビオサエ	10YR8/1 灰白	S008 上層	内面薄いコゲ
292-01	93	弥生土器	脚台鉢(精製)	弥生時代後期後半	口径 12.40 器高 7.30 底径 4.00	外面：コビオサエ、ナデ 内面：ナデ	5YR8/1 灰白	S008 下層	外面に薄くスス付着
304-02	94	弥生土器	高坏	弥生時代後期後半	器高 (8.15) 底径 (11.40)	円形スカシ3孔 外面：ヘラミガキ 内面：絞り目	2.5Y7/2 灰黄	S008 上層	脚端部にスス付着
037-01	95	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 14.20 器高 (13.40) 最大径 14.50	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	S012 (第4層) 灰白色砂礫層	外面全面スス付着、内面口縁部にスス、体部下半薄いコゲ付着
277-01	96	弥生土器	有孔鉢(尖底)	弥生時代後期後半	器高 (9.60) 底径 1.50	外面：タタキ、コビオサエ 内面：板ナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白	S012 (第4層) 上層	

第4章 総括

検出遺構について 今回の調査では、南北に細長い調査区中でX-159,036mを境に堆積環境が異なる。南側は弥生時代後期以前に離水し標高26.3m前後の微高地となり、弥生時代後期後半～庄内式期に居住域として利用される。北側は反対に土地が低く、より遅い時期まで湿地状の凹地である。遅くとも中世に耕地化され(2層)、近世には東西に細長いS006ため池(図13)が築造されている。

この凹地は、南端から北東約50mの地点で弥生時代中期の柱穴や弥生時代後期の土坑S0928を標高26.2m前後で確認できるため、弥生時代中期の幅はこれより狭いと考えられる。この大きい凹地内の南端で検出されたS005凹地には、微高地上から破棄された弥生時代後期～庄内式期Ⅱの土器が出土している(図14～16)。その下層には北西方向に流れていたS012流路(第4層)があり、堆積した植物遺体層の放射性炭素年代(1890±20BP)から庄内式古段階以前に放棄流路となったことがわかる。この流路は低位段丘構成層(第7層)を浸食しているため、調査区北側にある縄文時代以前の谷状地形を流路が南に側方移動しながら堆積物を上方に付加していったと考える。なお、流路の南側方への氾濫は認められず、流路が放棄される直前の水位は標高26m以下で流路幅も10m未満であったと推測される。

これら凹地と微高地上の遺構が確認されたことで、新堂遺跡内の微高地上に点在した集落の新たな手がかりを得ることができた(図25)。

出土遺物について 調査ではコンテナ30箱の遺物が出土し、うち96点を実測した。遺物出土量が最も多かったのはS005凹地で、S008溝がそれに次ぐ。S008溝出土土器は弥生時代後期後半に帰属し、北側斜面下にあるS005凹地から出土した土器よりも古い様相を呈する。

S005凹地から出土した土器は、泥質堆積に破棄された後は攪乱を受けておらず、比較的良好な状態である。甕以外の器種にも被熱痕が認められ、椀形高坏(61)が平底鉢(40)を載せられたままの状態で出土しており、廃棄行為については今後検討が必要である。

これらの土器は、ほぼ伝統的V様式の土器様相で弥生時代後期後半～庄内式期Ⅱ(庄内式古段階)に帰属すると考えられる。上層から出土した弥生時代後期後半に帰属する個体は、S008溝をはじめとする南側の斜面上に位置する遺構群から流入した可能性がある。

器種ごとの特徴であるが、壺は広口壺と直口壺の両者が出土しており、生駒西麓産胎土の垂下口縁広口壺(16)

が1点含まれている。

甕は1点を除き、球形化が進んだ体部に突出した平底または突出しない小さい平底が付くタタキ甕である。例外の1点は生駒西麓産胎土の小型甕(33)で、倒卵形を呈する体部に尖り底に近い底部を持つ。成形のタタキ方向は左上りで、一部右上がりのタタキと交差する。庄内形甕と思われるが、体部外面に明瞭なハケ調整を観察することができない。

高杯は弥生時代後期後半～庄内式古段階の各時期に帰属する有稜高杯が出土している。また、庄内式古段階に帰属する外面に縦方向のミガキを施す有段高坏(57)と脚裾部が大きく広がる椀形高坏(59)が出土している。鉢は体部が球形で尖り底の有孔鉢(49)があり、小型品はバリエーションが豊富である。また、内外面に精緻な横方向のミガキを施し赤色顔料を塗布した精製鉢(47)は中河内で出土するものに似る。

小型器台の可能性のある土器(71)は1点出土しているが、他に小型精製器種が出土しておらず、庄内系高坏も見当たらない。そのため、帰属時期は庄内式期Ⅰまで遡る可能性もある。今後、市域北側の遺跡や更に北側にある瓜破遺跡などの事例をふまえ、当地での土器様相を明らかにしていく必要がある。

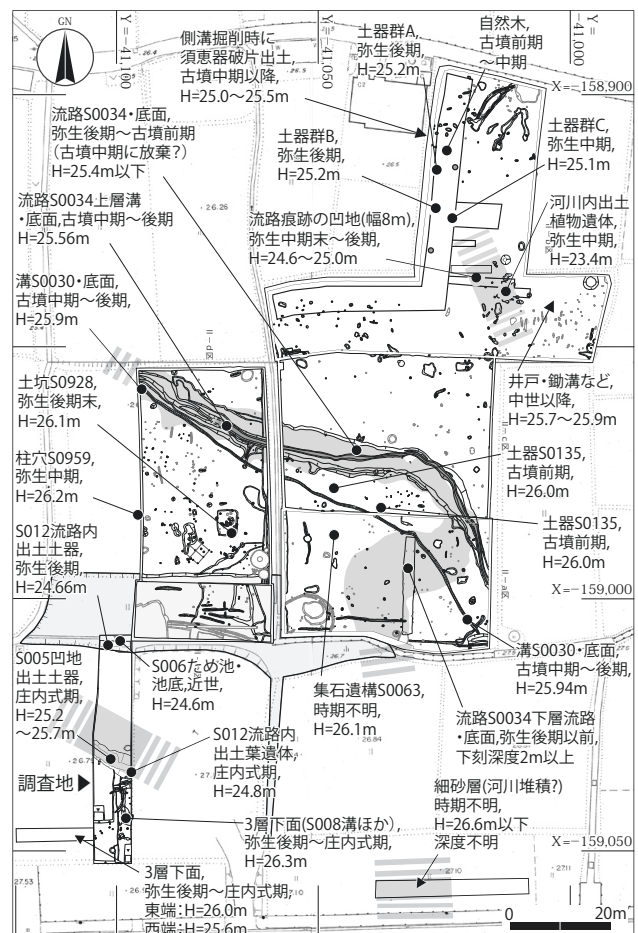
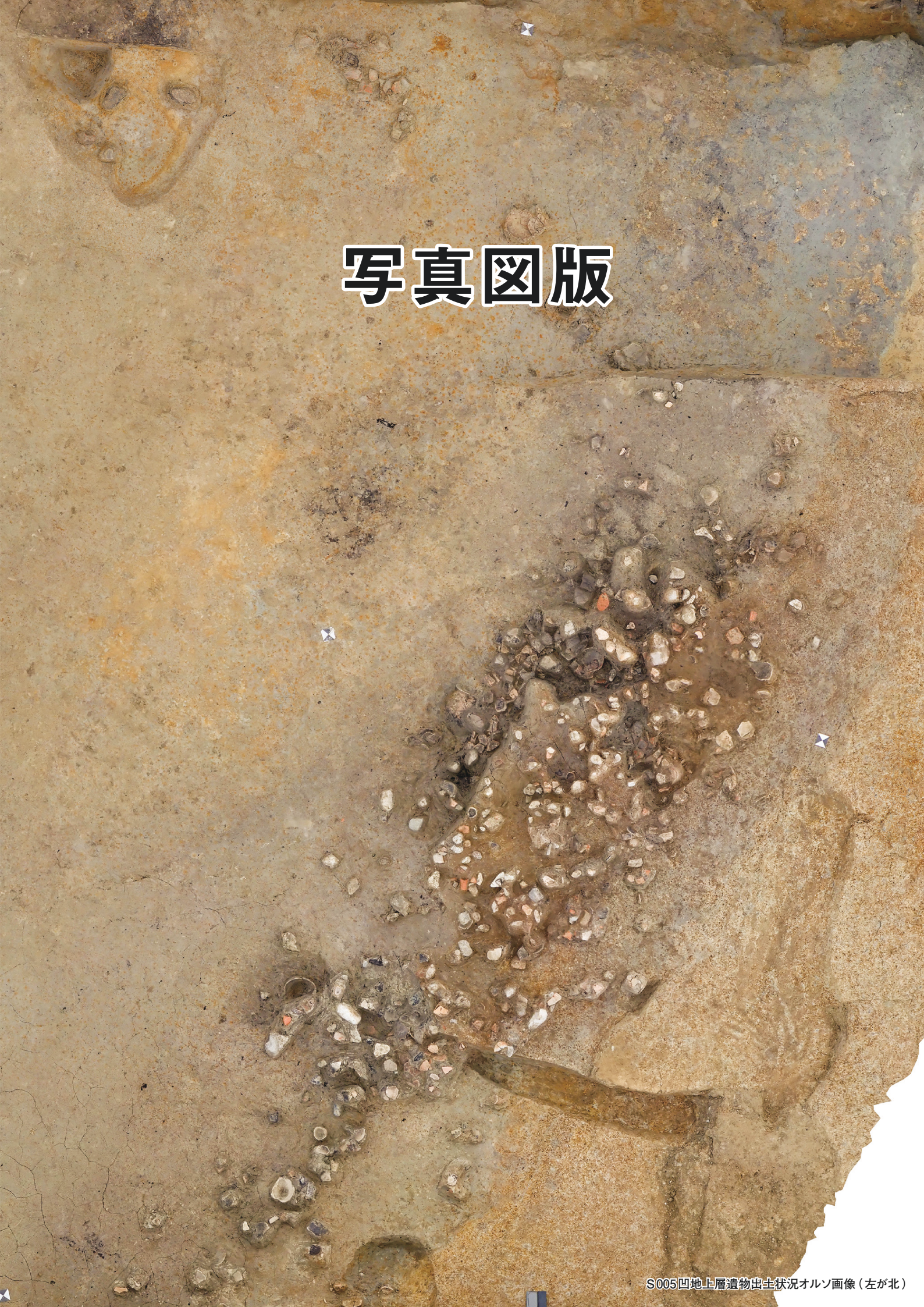
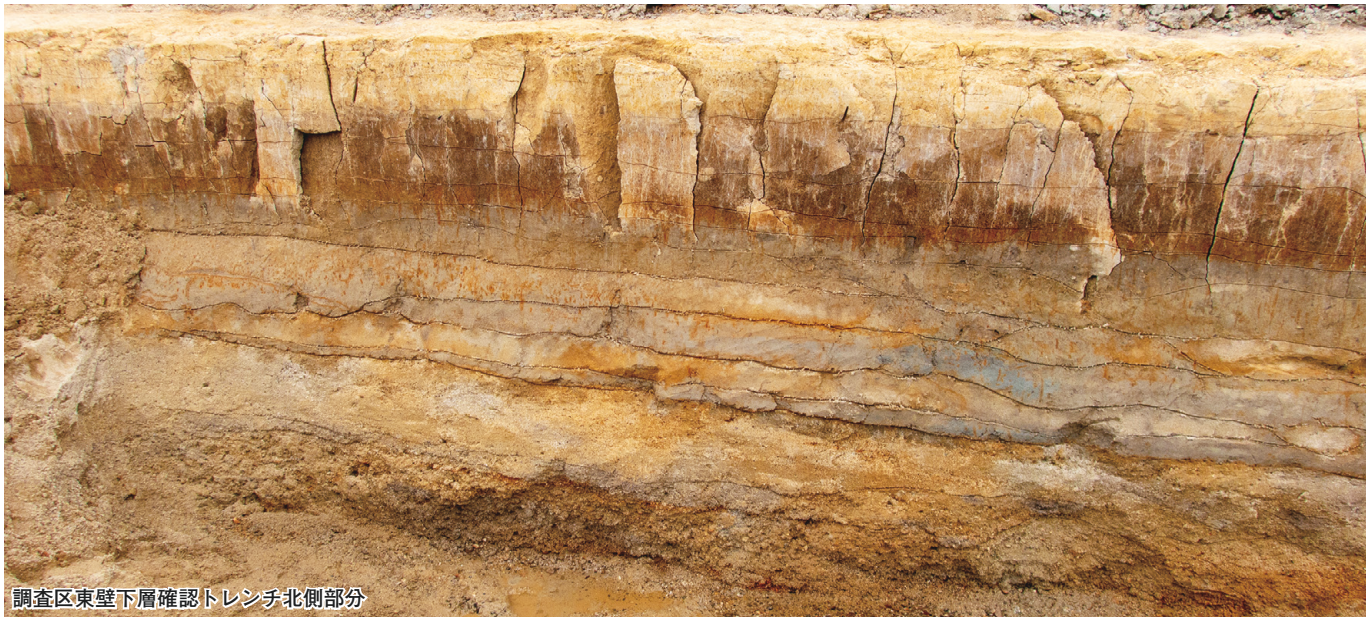


図25 弥生時代～古墳時代の主な遺構 (1:1500)

写真図版

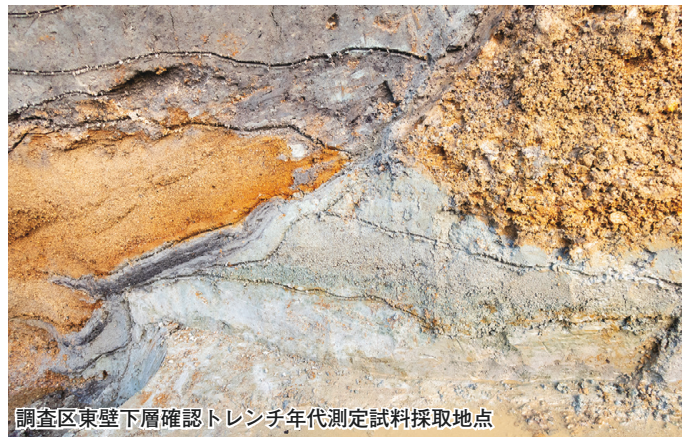




調査区東壁下層確認トレンチ北側部分



調査区東壁下層確認トレンチ最下部礫層



調査区東壁下層確認トレンチ年代測定試料採取地点

H=26.5m



— 広葉樹の葉遺体(PLD-49059)
1890±20 BP(114-217 cal AD (91.00%)),83-96 cal AD (4.45%)

H=24.5m

調査区東壁下層確認トレンチ南側部分のオルソ画像(1:20)



遺構完掘後全景 北から

図版2



1. 完掘全景（調査区南部遺構群） 南西から



2. S006ため池東壁土層断面 西から



3. S005凹地・S012流路東壁土層断面 北西から



4. S008溝上層遺物出土状況 東から



5. S008溝下層遺物出土状況 東から

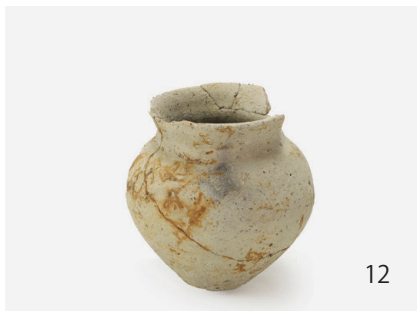


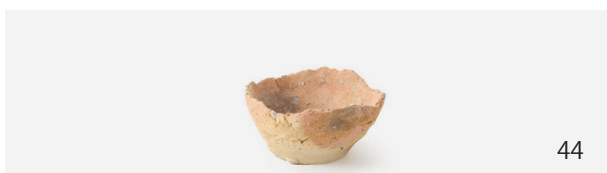
1. S005凹地上層遺物出土状況 西から



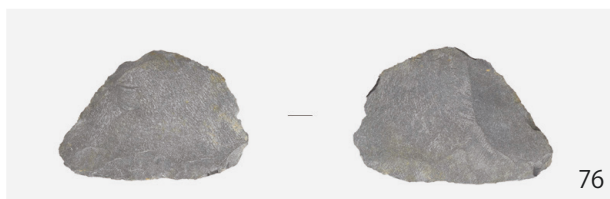
2. S005凹地下層遺物出土状況 北西から

图版 4





图版 6



報告書抄録

ふりがな	しんどういせき3							
書名	新堂遺跡3							
副書名1	松原市新堂4丁目地内における店舗建設工事に伴う新堂遺跡E7-1-69発掘調査報告書							
副書名2								
シリーズ名	松原市文化財報告							
シリーズ番号	第15冊							
編著者名	大矢 祐司(編集)、古川 登、高見澤 太基							
編集機関	松原市教育委員会							
所在地	〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1番1号 TEL 072-334-1550							
発行年月日	令和5年(2023)6月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
しんどういせき 新堂遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらししんどう 松原市新堂4丁目	27217	15	34° 33' 56"	135° 33' 07"	20221101 ～ 20221216	311㎡	店舗建設に伴う記録保存調査
収録遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新堂遺跡	集落	弥生～古墳	土坑、井戸、溝、ピット、流路、凹地	弥生土器、土師器(庄内式土器)、土玉、石器、軽石	流路の名残であるS005凹地から弥生時代後期～庄内式期の土器がまとめて出土			
	散布地	弥生～古墳、古代	包含層	弥生土器、土師器、須恵器	北側のE7-1-61Ⅱ-a区ほど多様な時期の遺物は出土せず			
	田畑	近世	耕作溝、ため池	国産染付	耕作溝は正方位で、ため池は北側のE7-1-61Ⅱ-a区で検出されたものと同一			
要約	<p>今回の調査は、松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う調査(E7-1-61)のすぐ南側で実施したものである。調査では、新堂遺跡のうち沖積低地での弥生時代後期～古墳時代初頭における土地利用をより明らかにすることができた。</p> <p>調査区南側の微高地上では、弥生時代後期後半～庄内式期にかけての集落を確認した。建物跡は確認できなかったが、破棄された土器の量から居住域と考えられる。</p> <p>調査区北側の低地部では、S012流路の名残であるS005凹地から弥生時代後期～庄内式期の土器がまとめて出土した。S012流路の植物遺体層に含まれていた広葉樹葉遺体の放射性炭素年代測定結果が1890±20 BP(114-217 cal AD(91.00%))であるため、流路が放棄され凹地となった後すぐに土器が破棄されたと考えられる。</p>							

松原市文化財報告 第15冊

新堂遺跡 3

松原市新堂4丁目地内における店舗建設工事に伴う新堂遺跡E7-1-69発掘調査報告書

発行年月日 令和5年(2023)6月30日

編集・発行 松原市教育委員会


〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1番1号

電話 072-334-1550 (代表)

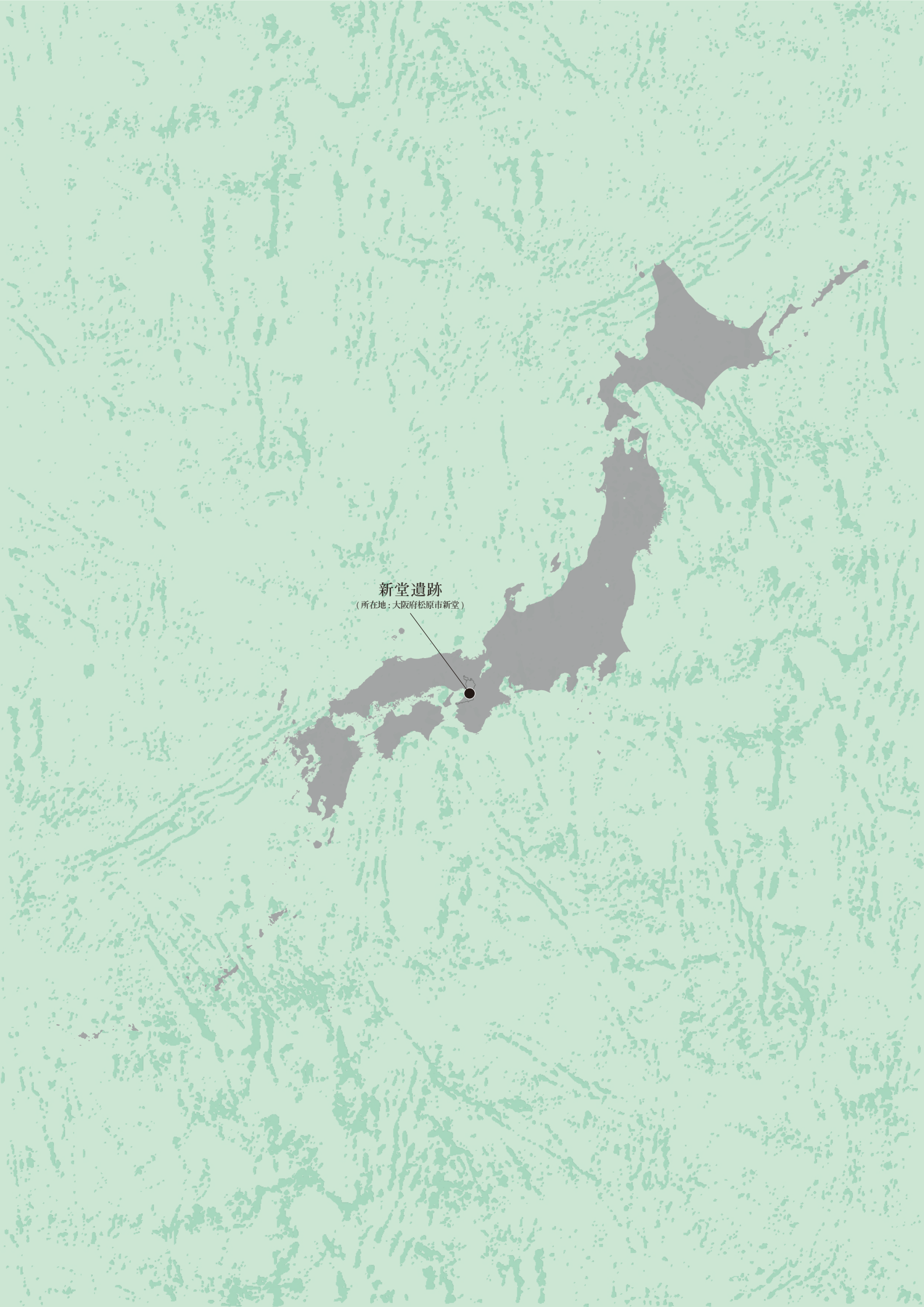
印刷・製本 能登印刷株式会社

〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号

本書の著作権は、図1・2・25の背景地図および裏表紙を除き松原市教育委員会に帰属しますが「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示 4.0 国際」にもとづき、出典の表示を条件として自由な二次利用を許諾します。

新堂遺跡3©2023 by 松原市教育委員会 is licensed under CC BY 4.0 DEED. 

なお、数値的なデータや簡単な表・グラフ、拓本などについては、著作権が発生しないため自由な二次利用が可能です。



新堂遺跡

(所在地: 大阪府松原市新堂)